

厚岸町町制施行 1 2 0 周年記念



厚 岸 歴 史 夜 話

厚岸町史編さん委員が執筆し、2001年5月号から2004年9月号までの41話にわたり、広報「あっけし」に掲載した厚岸町の歴史に関するお話です。
町制施行120周年を機に厚岸町の歴史に触れてみましょう。

厚 岸 町



■文・高嶋 弘志 (たかしま・ひろし)

釧路公立大学教授・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈1〉

箱館戦争と厚岸①

池田儀右衛門は、明治前半期の厚岸で戸長や郡総代などの公職を歴任し、厚岸町の基礎を築いた人物です。儀右衛門が残した日記から厚岸と箱館(函館)戦争との関係を今月と来月で取り上げます。

明 治二(一八六九)年の元旦を厚岸会所で迎えた儀右衛門の顔色はさえないかった。というのも半月前から蝦夷地は、榎本武揚を首領とする旧幕府脱走軍に占領されていたからです。

新政府が設置した箱館府(裁判所)の知事清水谷公考は、詰合と呼ばれる下級役人を各地に残したまま、幹部を連れてさつさと青森に逃げてしまいました。

この当時、箱館の情報が厚岸に届くにはおよそ一カ月を必要としました。さまざまな風説が伝えられるたびに儀右衛門の不安は募りましたが、その一方で遠い厚岸にまで被害が及ぶことはあるまいとも思えました。

しかし、予想は悪い方の中するものです。榎本軍は蝦夷地開拓のために室蘭に開拓奉行を置き、二月下旬その幹部で静内に駐留していた雑賀孫六郎から手紙が届きました。それには石炭積み込みのために釧路・厚岸に回航し、国後島には軍艦二隻を派遣したいと書いてあります。どうやら日高地方はすでに榎本軍の手に落ち、そこから順次奥地に兵を進める計画のようです。道東地域を警備していた仙台藩は昨年八月に退去していたので、

厚岸はまったくの無防備でした。

こ の手紙をきっかけに、詰合たちの往来が急に慌ただしくなり、なかには公然と榎本軍への支援を決める者もいました。厚岸でも、詰頭の山岡半之助が榎本軍に加担することを表明し、それに反発した二名の詰合本多と大島は釧路に退いてしまいました。釧路には新政府に忠誠をつくす詰合が集まっていたのです。

四月になり、榎本艦隊の属船長鯨丸が補給のため厚岸に寄港したいとの知らせが入り、五月の手紙では千人程の兵士を乗せて来航するという内容です。ついに恐れていた事態が訪れました。黒煙を吐く長鯨丸が厚岸に姿を現したのは、五月二十二日の昼過ぎでした。(つづく)



■明治3年ころの厚岸会所(湾月町付近)



■文・高嶋 弘志 (たかしま・ひろし)

釧路公立大学教授・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈2〉

箱館戦争と厚岸②

厚岸に現れた長鯨丸には、艦長喰代和三郎以下、百人ほどの兵士と船員が乗っていました。上陸した兵士は、会所の備品台帳を提出させ、蔵に保管してあった非常用の備米を検分したり、燃料用の薪の提供を求めたりしました。池田儀右衛門がこの命令を拒むことはできま

せませんでした。言われるままに薪を提供し、茶菓子や酒で乗組員をもてなしました。一行のうち二十人余りが仙鳳趾を越えて釧路に向かいました。翌日釧路は彼らによって制圧されてしまいます。榎本軍は銘々鉄砲を携え、詰合の役宅に向けていきなり発砲し、釧路場所の明け渡しを要求しました。そのため釧路に集まっていた詰合たちは一斉に逃亡し、戦争が終わるまで山野をさまよっていたのです。

その頃、すでに十勝も榎本軍に蹂躪されていきました。五月下旬、襟裳の山道を越えて広尾に来襲し、備米を押収していました。兵士たちは、そのまま海岸通りを進み、釧路・厚岸を目指しました。五月二十七日、開拓奉行の頭取木村宗蔵が仙鳳趾経由で厚岸に到着しています。これが陸路で到着した第一陣でした。木村は陣屋の武器類、会所蔵の備米を押収し、船に積み込みました。

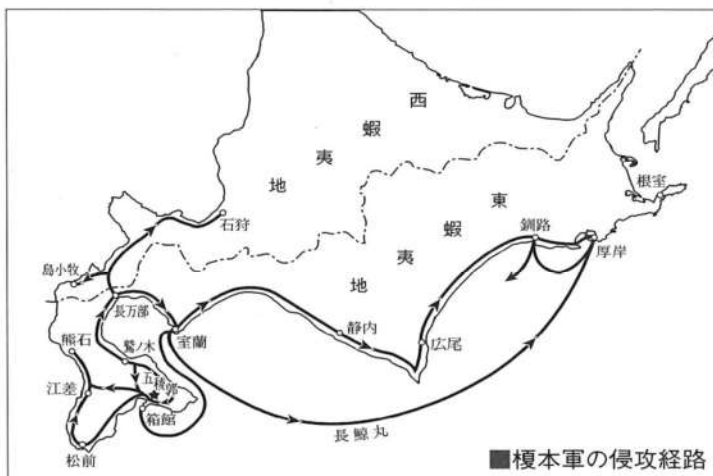
六月一日、長鯨丸は十日間の厚岸滞留を終えて、釧路に向けて出帆しました。儀右衛門が安どしたのもつかの間、今度は釧路から鈴木権兵衛・大久保伝蔵

という者たちがやって来て、百両の金を要求しました。儀右衛門が金を渡すと、二人はすぐに釧路に帰っていきました。

長鯨丸が釧路を出帆したのは六月六日、各場所から奪った米や金は榎本軍の乏しい軍備を補うものでした。ところがその半月前に榎本軍は降伏していたのです。

新政府軍に接収された長鯨丸が室蘭の降伏人二百五十人を乗せて、再び箱館に入港するのは六月十二日でした。

一陣の風は瞬く間に過ぎ去り、厚岸にはまた平穏が戻りました。箱館戦争が厚岸とも無縁でなかったことを、儀右衛門の日記は語っています。





■文・高嶋 弘志 (たかしま・ひろし)

釧路公立大学教授・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈3〉

屯田兵を運んだ船

太

田村は明治二十三(一八九〇)年六月に山形、新潟、石川、福井、宮城、兵庫、和歌山、山口の八県士族四百四十戸が移住して成立した屯田兵村です。

この屯田兵は、石川(半数)、新潟、山形の三県士族を乗せた第一便に続き、第二便(宮城県)の新潟丸(函館から駿河丸)、第三便の和歌浦丸と、三回にわけて厚岸にきました。しかし第一便の船名が最後までわかりませんでした。

『西野家行囊帳』はこの船を「伊勢丸」と書いています。そのため「厚岸町史」もそれを踏襲してきました。ところが当時の新聞によれば屯田兵が厚岸に到着したところ、伊勢丸は神戸を発って新潟に向かっている途中ですから屯田兵を乗せていません。これに対し、屯田兵の岩間富次郎は「二十一日午後石崎丸に乗船」、また秋江隆福の子隆長も「二十一日酒田港より石崎丸に乗組」と書いています。『函館新聞』や『北海』も同様の書き方をしているの

で、「石崎丸」で間違いないようです。ただひとつ例外がありました。『新潟新聞』に「(本県屯田兵は)汽船浦川丸に搭じ出發せしよし」とあって、新たに「浦川丸」の名が出てきたのです。

し

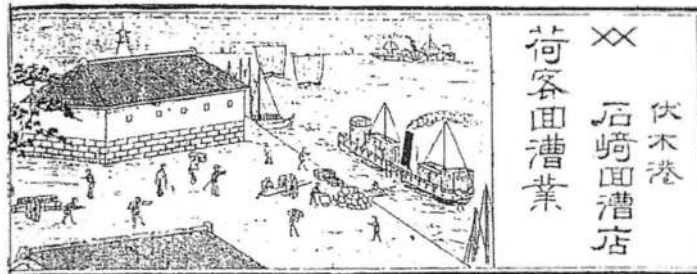
かし、全国の船名を記載する『日本船名録』に浦川丸の名はありません。

これはどういうことでしょうか。フツと頭をよぎったのは、浦川丸の「川」は「門」の誤りではないか、ということでした。

この二つの字は草書体ではよくにているのです。でも「浦門丸」はその頃、貨物船として柏崎、新潟、酒田を往復していたことが分かりました。これで「浦門丸」説は消え、第一便が石崎丸であることが確認できたのでした。

ひとつ不安だったのは、石崎丸が『日本船名録』の明治二十二年版に掲載されているのに、二十四年版には見えないことでした(二十三年版は欠号)。

しかしその疑問はすぐに解けました。石崎丸は屯田兵を運んだ翌年五月、小樽から石炭を積んで横浜に向かう途中、銚子沖で沈没していたのでした。



■富山県伏木港の石崎回漕店と
沖合航行中の石崎丸



■文・高嶋 弘志 (たかしま・ひろし)

釧路公立大学教授・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈4〉

明治29年の日食

日 食はそれほど珍しい現象ではありませんが、太陽が完全に隠れる皆既日食となると一生に何度も見ることはできないでしょう。

明治二十九(一八九〇)年八月九日、北海道東部が皆既日食帯に入ることになり、世界中の注目を浴びたことがあります。この時、各国の研究者が観測のために来道しました。観測隊が集中したのが厚岸と道北の枝幸でした。内陸部の方が気象条件は良いのですが、当時は交通の便が悪く敬遠されたのです。

厚岸で最も張り切っていたのがイギリスでした。王立天文台やオックスフォード大学などの研究者が軍艦に乗って到着しました。厚岸湾には観測に協力するイギリス極東艦隊の軍艦が五隻も停泊していました。アメリカ隊や日本の帝国大学と海軍大学も厚岸を選びました。これらの観測隊は、料亭大泉楼(アメリカ)、湾月町(イギリス)、真龍村(帝国大学)、戸長役場(海軍大学)そして太田村の五カ所に陣取り、万全の体制で当日を待ちました。

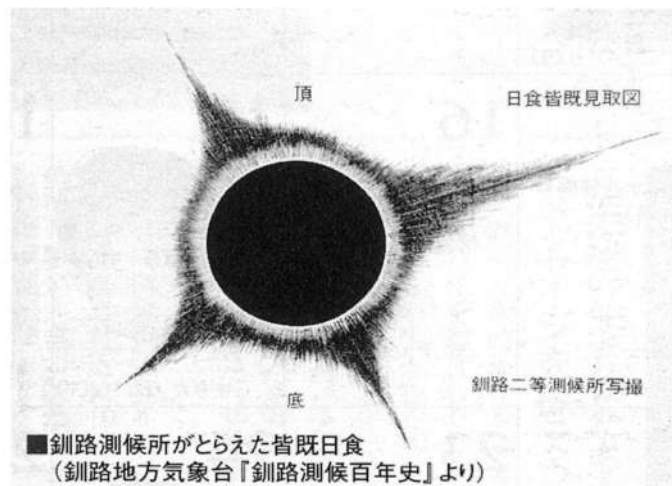
し かし、当日の厚岸は折あしく朝から濃霧に包まれました。午後になって雲を透かして欠けていく太陽が確認できましたが、再び霧が深くなり皆既の時には全く見えなくなっていました。枝幸も曇天で観測は失敗に終わりました。

湾月町で旅館を経営していた池田儀右衛門は日記に「本日の日食、曇天につき

判然いたさず」と書いています。

太田村出身で帯広の十勝分監に勤務していた富田広厚も「帯広は曇って観測できなかった。太田村もやはり曇天で判明しなかったらしい。釧路港は幾分良かったようだ。各国より多くの人が入っているが十分な観測ができず落胆の様子だ」と、親戚への手紙に書いています。

これに対し、標茶にあった釧路測候所では雲の切れ間から日食を捕らえることができ、貴重な観測結果を残しています。観測隊の人々は泣く泣く厚岸を後にしましたが、厚岸にこれだけ世界の研究者が集まったことは初めてでした。町の人々はどんな迎え方をしたのでしょうか。



■釧路測候所がとらえた皆既日食
(釧路地方気象台『釧路測候百年史』より)



■文・高嶋 弘志 (たかしま・ひろし)

釧路公立大学教授・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈5〉

湯殿山神社

厚 岸の歴史にはまだまだ分からないことがたくさんあります。そのひとつが湯殿山神社のことです。

吉祥寺裏にある小山を湯殿山といいます。正式にはオボケ山というのですが、山頂付近に湯殿山神社が建てられたので、湯殿山と呼ばれるようになったのです。

いつ誰が建立したのか全くわかりません。湯殿山の名は明治二十二(一八八九)年の新聞に見えるのが最も古い例です。

湯殿山は山形県の出羽三山(羽黒山・月山・湯殿山)の一つで、古くから修験道場として名高く、真言宗の寺院が祀っていました。明治になって出羽三山神社になります。神仏習合の信仰は今でも東北地方を中心に残っています。

厚岸の湯殿山神社は、日清戦争の最中には戦勝祈願祭を催すなど、祈とうの神社として知られていました。明治三十九年ころの社掌(神職名)は梅本政雄という人でした。梅本は厚岸神社の神主を一時兼ねていたことがあります。一種の祈とう師であつたと思われます。

と ところで釧路市の浪花町にもかつて湯殿山神社がありました。その家も梅本さんといえます。ご先祖の位はいに交じって、梅本政雄の位はいが残っていました。すなわち二つの湯殿山神社は、梅本一族が建立した可能性が高いことになります。

釧路に渡ってきたご先祖は梅本常磐と

いう人です。出身地は不明ですが、秋田県能代から養子をもたらしているのが、この地方と関係のある人だと考えられます。秋田は湯殿山信仰の盛んなところ。同地で信仰を深めていた同家が、漁民の移住にしたがつて厚岸や釧路に新天地を求めたのかもしれない。

吉祥寺の斎藤住職と湯殿山に登ったことがあります。深い草やぶの中に拝殿が一棟だけ残っていましたが、それは関係者から聞いていた昔の建物ではなく、昭和三十年代に新築されたものでした。

昭和四十年代までは、春秋に例祭を執行し、特に秋の大祭には余興に田舎芝居や子供相撲が行われ、夜店も出てなかなかにぎやかだったようです。今では湯殿山のことを知る人も少なくなりました。



■草やぶの中に残る拝殿



■文・高嶋 弘志 (たかしま・ひろし)
釧路公立大学教授・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈6〉

国泰寺の晦巖和尚

国 泰寺の住職は鎌倉五山（建長寺・円覚寺・寿福寺・淨智寺・寿妙寺）が輪番で派遣することになっていました。江戸時代最後の住職が九世の晦巖玄育です。この晦巖は万延元（一八六〇）年、淨智寺の塔頭（寺内にある小寺院）正源院から派遣されたことになっています。

ところが晦巖は建長寺の末寺玉泉寺（東京都青梅市）の住職でした。同寺の古文書には、淨智寺から「法縁」によって国泰寺の住職就任を依頼されたと書いてあります。淨智寺は玉泉寺とは本末関係がないにもかかわらず、なぜ「法縁」などと言ったのでしょうか。

『国泰寺明細調』にそのヒントがありました。それによると晦巖は文政九（一八二六）年、国泰寺で得度（剃髪して仏門に入ること）したと書いてあります。

その時の住職こそ正源院出身の四世仙叟玄機でした。おそらく幼少の晦巖は、仙叟に連れられて国泰寺に入り、小僧として修行したのでしょう。すなわち晦巖は仙叟の弟子だったのです。諱の玄育は仙叟玄機の一字を継いだものと考えられます。これが「法縁」の意味です。

そ れから三十余年、淨智寺が住職を派遣することになった時、寺内に適任者が得られなかった同寺は、苦肉の策で仙叟の弟子晦巖に白羽の矢を立てて、淨智寺の僧として派遣したのです。厚岸の生活経験がある晦巖は最適の人物でした。

『日鑑記』を読むと、晦巖は仙叟のことを「先師」と呼び、命日には欠かさず供養をしています。晦巖が作った漢詩が『日鑑記』にあります。

三十年前育侍者 再来今日住山翁
子帰就父底時節 坐断景峰继祖風

「三十年前の育（晦巖のこと）は侍者であつたが、再来して今は住職となつている。子が父のもとに帰る機会を得たのだ。景峰（国泰寺を指す）において迷い苦しみを断ち祖風を継ぎたい」というような意味で、先師と過ごした国泰寺に帰ってきた喜びを詠んだものです。

晦巖は幕府崩壊後の国泰寺を守り抜き、明治六（一八七三）年亡くなっています。



■玉泉寺（東京都青梅市）の山門



■文・高嶋 弘志 (たかしま・ひろし)

釧路公立大学教授・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈7〉

藤田嵩嶽と南禅寺

国 泰寺の九世晦巖まいがんに続いて、今回は十世藤田嵩嶽かうがく(諱は庭可)を取り上げます。嵩嶽は晦巖の弟子でした。越後国(新潟県)高田藩士藤田大作の弟で、弘化二

(二八四五年)玉泉寺(東京都青梅市)に入り、住職の晦巖から得度とくどを受けています。

晦巖が国泰寺に移った後、玉泉寺の住職に就任しましたが、慶応三(一八六七)年五月、寺内に置いていた「俗縁の者」が不祥事をおこしたため「後のことはよろしく頼む」との書き置きを残して出奔してしまいました。このとき師の晦巖を頼って国泰寺に來たのです。

嵩嶽は老病の晦巖を助けて、国泰寺の雑務を切り盛りしました。晦巖が明治六(一八七三年)に病死した後、幕府の保護を離れた国泰寺に檀家制度を取り入れ、昆布干場を寺有財産とするなど、ひたすら寺の維持経営に努めました。

京 都の南禅寺を本山に選んだのも嵩嶽でした。明治十六年、東京の金地院こんちいん(南禅寺の末寺)から藤田古梅こばいという僧侶が訪れ、国泰寺を金地院の末寺とするように勧めました。江戸時代の金地院は鎌倉五山を統轄し、国泰寺の住職を選任する権限をもっていたので、国泰寺とは因縁の深い寺院だったのです。

これに対し嵩嶽は、それでは国泰寺は南禅寺の孫末になってしまふ、それよりは南禅寺直末としたいと返答し、その手続きを古梅に依頼したのです。直末と孫

末とでは地位が全く違うからです。

古梅がこの無理な注文を引き受けたのには理由がありました。建長寺の書類によれば、古梅は藤田大作の六男で、嵩嶽の甥にあたるのです。嵩嶽に遅れること五年、嘉永三(一八五〇)年に玉泉寺に入り、晦巖から得度を受けています。

明治になり国泰寺は廃寺の危機を迎えましたが、これを嵩嶽は古梅の協力を得て立て直したのです。嵩嶽はまさに「国泰寺中興の祖」といえるでしょう。

嵩嶽は国泰寺を南禅寺から派遣された住職に譲って、太田村に建立した報国寺に移り、明治四十二(一九〇九)年、七十三歳の生涯を閉じました。



■報国寺にある嵩嶽の墓



■文・高嶋 弘志 (たかしま・ひろし)

釧路公立大学教授・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈9〉

太田紋助と屯田兵

太田紋助は厚岸にとって忘れられない偉人の一人です。国泰寺で育てられた紋助は、明治初年には厚岸のアイヌ民族の指導者に成長しました。アイヌの人たちに農業を教えるため、別寒辺牛やホマカイ(ヤマコベツ)に自力で農場を拓き、共同で開墾していました。

明治十年代後半、釧路に鳥取県士族が移住し、標茶に集治監(監獄の一種)が建設され、根室にも和田屯田兵村が開村すると、釧路や根室にぎわう一方で、ほとんど漁業に頼るだけの厚岸は近代化からとり残されてしまいました。

明治十八(一八八五)年、厚岸の有志はこのばん回策として屯田兵の誘致を請願しました。そして屯田用地として別寒辺牛とノコベリベツの間を選びました。これは現在の奥別寒辺牛のあたりだと思われます。

ところがこれに強硬に反対したのが太田紋助でした。紋助は昼夜をわかつ山野に入り入植地の選定に努め、自分が耕作していたホマカイが最良の地であると推薦しました。

翌年、屯田兵本部長の永山武四郎が屯田兵入植地を選定するために全道を巡回した時、厚岸では請願者たちや紋助が随行し、候補地をあちこち見て回りました。最後にホマカイを見た一行は、紋助の農場で作物がよく実っているのに驚嘆したといいます。結局、この地が「北海道東

部の枢要の地」という評価を受け、屯田用地に決まったのです。

この新しい兵村の名は、太田村と命名されました。用地の選定に功績のあった太田紋助をたたえるためです。

全道三十七の屯田兵村で人名がついているのは、ほかに和田村(和田正苗)と永山村(永山武四郎)がありますが、両村は屯田兵幹部の名であり、民間人の名がついたのは太田村だけです。

明治二十三年に屯田兵が移住すると、紋助は所有していた繁殖用の牝馬を提供し、なれない北国に移住した屯田兵の世話を親身も及ばぬ親切で尽くしました。

二十五年、紋助が出張中の函館で亡くなると、太田村では兵村葬をもってその霊を弔ったということです。



■報国寺にある太田紋助の墓碑



■文・高嶋 弘志 (たかしま・ひろし)

釧路公立大学教授・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈10〉

囚人道路とカリカン

真

龍の浜から国道をまたいで変電所の前を通り、心和園の前でやや西に折れ尾幌川に向かう道があります。これは囚人がつくった道路です。

明治十八(一八八五)年、標茶に釧路集治監^{ちかかん}という監獄が建てられました。今の標茶高校の敷地です。ここには全国から重罪囚が送られ、川湯の硫黄山で硫黄を採掘し、釧路から網走に至る道路を開削するなど、道東の開発に大きな役割を果たしました。

厚岸に屯田兵を置くことが決まると、厚岸の有志は厚岸・標茶間を道路で結ぶことを道庁に要請しました。この路線を選定したのも太田紋助^{ようもと}です。

明治二十一年、看守長四元清に率いられた囚人二百人は、わずか半年余りでこの道路を完成させました。深い樹林を伐採するのには、樹上に囚人を追い上げ枝をはらわすという乱暴なことが行われたといえます。太田二番通りを貫通し、片無去・雷別を経て標茶に至る三十八・二^きの道路ですが、総工費三千五百円という実に安上がりな工事でした。

道

路が竣工すると同時に、囚人は屯田兵屋の建設に投入されました。この時、尾幌川の北側、三番の沢付近に囚人を収容する仮監^{かりかん}が建てられ、ここで伐採した木材を加工しました。昔は土の中から材木の削り屑が見つかったということです。この一帯をカリカンと呼び、屯田

用地に登る急坂をカリカン坂、尾幌川に架かる木橋をカリカン橋といいました。今でも橋の土台が川の中に残っています。兵屋四百四十棟と中隊本部・官舎など合わせて四百九十二棟のすべてが落成したのは、屯田兵が移住する一カ月前の明治二十三年五月でした。

太

田村では屯田兵の現役期間三年を終えると、出稼ぎや就職で村を離れる人が増えてきました。集治監の看守は屯田兵にとって格好の職種でした。明治二十九年の記録によれば、釧路集治監の看守の二割が実に太田村の出身者でした。標茶・厚岸間の道路をつくり兵屋を建設した囚人が、今度はその屯田兵に監視されるといふ皮肉な巡り合わせでした。



■カリカンのあった三番の沢を望む(手前は尾幌川)



■文・高嶋 弘志 (たかしま・ひろし)

釧路公立大学教授・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈11〉

ある英国人の見た厚岸

明

治二十三(一八九〇)年、サベージ・ランドーというイギリス青年が北海道一周の旅に出ました。その記録が『エゾ地一周ひとり旅』(戸田祐子訳、未来社刊)です。

函館から馬で海岸沿いに歩いたランドーは、八月中旬に釧路に着き、そこから阿寒湖・屈斜路湖を巡った後、標茶を経て厚岸に向かいました。この途中で道路工事をしている囚人に出会っています。これは釧路集治監^{しゅうちかん}の囚人といわれています。すが、厚岸監獄の囚人かも知れません。

ランドーは太田村を訪れた最初の外国人でした。二カ月前に開村したばかりの太田村では、まったく同じ形、同じ大きさの家が等間隔で道路の両側にならび「多くの屯田兵が雑木林を引抜き、また木を裂いたり切り倒して役に立たない部分を燃やしたりする作業に従事している」光景を目にしましたが、深い樹林を耕作地に仕上げるには相当の年月を要するだろうと述べています。

しかし「屯田兵は土地を耕すという事業に熱心であり、生活態度が正直で道徳的であるという点で、かなりよい結果をもたらしているように思われる」と、その仕事ぶりに好印象をもちました。

別

寒辺牛川の河口から舟で厚岸に渡ったランドーは湾の渦にあつた牡蠣^{かき}の養殖場で長さ十八^{イシ}(約四十五^{センチ})もある巨大な牡蠣を見て驚きます。

霧の晴れた厚岸湾は美しく、特に外洋に突き出た数々の岬や岩礁によって本土とつながる大黒島・小島の風景、その大黒島の断がいに巣をつくる何万羽もの海鳥には大いに興味が引かれました。

当時の厚岸は釧路の半分くらいの規模で、和人の家が約九百戸、アイヌ人の家が六、七十戸ほどあったということです。アイヌ民族が昔に比べ減少していることに彼の胸は痛みました。

厚岸湾は「エゾ地の南岸で最良の港」であり、牡蠣をはじめとする無尽蔵の海産物、アザラシの毛皮、良質な木材の輸出により、遠くない将来には函館に次ぐ重要な港になるだろうと予想しています。

ランドーは慌ただしく厚岸を通り抜け、次の目的地の霧多布に向かいました。



■ランドーの自画像
(『エゾ地一周ひとり旅』未来社刊より)



■文・高嶋 弘志 (たかしま・ひろし)

釧路公立大学教授・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈12〉

屯田兵と日清戦争

屯

田兵は北海道の防衛と開拓を目的としていましたが、幸い北海道が戦場になることはありませんでした。屯田兵が経験した唯一の戦争は明治十(一八七七)年の西南戦争ですが、この時は札幌の屯田兵が参加しただけでした。

ところが明治二十八年三月、全道の屯田兵に出動命令が下りました。前年に始まった日清戦争に参加するためです。村を離れていた兵士も太田村に帰り、練兵場で毎日訓練に汗を流しました。三月二十日、いよいよラッパを先頭に四百四十人が隊列を組んで出発しました。厚岸に三日間宿泊し、その間郡民の盛んな歓迎を受けました。根室和田村の屯田兵を乗せて回航してきた土佐丸は「東洋第一の巨船」といわれた大きな船でした。この船で一行は青森に向かったのです。

青森に滞在しているうちに、各地の屯田兵が続々と集まってきました。太田の兵士は追いつかれないように特別列車で上京し、牛込区(現在の新宿区)の陸軍砲工学校に宿泊して、毎日厳しい訓練に励みました。四月中旬には千葉県の習志野演習場まで行軍しています。

東京の人たちは初めて見る屯田兵に興味津々でした。最初は「霜降りのズボン隊」といって嘲笑(あざわら)していた市民も、整然とした隊列を組み猛訓練をこなす兵士を見て、「屯田兵ノ武勇天下ニ比ナシ」と称賛するまでになりました。

し

かしこの東京滞在中に下関で講和条約が結ばれ、屯田兵の出征はついに幻に終わってしまいました。太田村のある兵士は「村を出たときの決意はいよいよ東京見物に過ぎざるに立至(たちいた)れり」と慨嘆する始末でした。

太田・和田両村の屯田兵は五月二十五日、新橋から汽車で横浜に向かい、再び土佐丸に乗り込みました。厚岸に上陸した屯田兵は酒肴(しゅこう)のもとを受け、翌日雨の中を太田まで行進し、小学校の凱旋式に臨みました。

明治二十九年、北海道に第七師団が置かれ、三十一年に徴兵令が道内全域に施行されるにいたり、屯田兵という特殊な軍制は役割を終えることになります。



■屯田兵を乗せた土佐丸(写真左)
『日本郵船100年史』より



■文・高嶋 弘志 (たかしま・ひろし)
 釧路公立大学教授・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈13〉

明治27年の大地震

道

東は地震の多いところですが。今回は明治二十七年(一九〇四年)三月二十二日におきた大地震を紹介しましょう。

この日、午後一時ころから数回にわたって微震が続いていました。しかし、これが大地震の前兆であるとは誰も気づきませんでした。この地震のことを山形県出身の梅沢小三郎が郷里の雑誌に投稿しています。

梅沢が湾月町の自宅に帰り、夕食後のだんらんを楽しんでいた七時二十三分、突然大きな揺れが襲いました。梅沢は「俄然大震動は東北方より来りしものかの如く」と書いています。

屋外に飛び出すと、警鐘が乱打され、それに建物が崩れる音と婦女子の叫び声が重なり、騒然としていました。立っていられず通行人に抱きつく人、風呂屋から裸で飛び出し南無阿弥陀仏を唱える人もいました。電信局の器械室より出火しましたが、これはすぐ消し止められました。揺れは三分二十秒も続きました。

地

震がおさまって家の中に入ると、机上の書籍は散乱し、植木鉢はすべて落下して灰をかぶっていました。片づける間もなく余震があり、再び外に出ました。五分あるいは十分ごとに余震が続き、大きな地震も数回ありました。人々は道路に板を敷いて畳を並べ、ただ停震を祈るしか方法がありませんでした。

そこにどこからともなく「津波、津波」

という叫び声が聞こえてきました。アイヌの古老に尋ねると、「三十年前の地震では、一時間後に津波が襲い、港の人家がごとごとく流失し、山上の寺院だけが残った」と話してくれました。貴重品を箱に入れて高台に逃れましたが、朝になって津波は来ませんでした。余震は数日間続き、門前の仮小屋やテントで一週間も暮らした人がいました。

こ

この地震は根室南方沖が震源で、マグニチュード七・六と推定されています。厚岸の震度は五ないし六で、当時の新聞は「今回の地震は厚岸港最も激烈にして中心にて在りしが如し」と書いています。梅沢は、五百戸足らずの市街地で、家屋の全壊二十六戸、損害九十六戸、負傷者三人と記録していますが、幸いに死者はいませんでした。

●厚岸の激震 根室の激震の電報に見えし如し
 第一昨二十三日夜四時三十五分及同三十六分北緯道庁の電信の左の件を報じぬ
 昨夜八時地震釧路厚岸に於て家二十五あり死人なし
 昨日午後七時二十三分より八時の間に於て札幌釧路厚岸に地震あり器物より落ち地の水も溢る等地方稀なる強震なり兼に釧路厚岸に強震厚岸にハ家二十五ありしも三ヶ所とも人畜死傷なし震動時間大概三分二十秒にて全く静止す他の各地ハ目下取調中なり
 ●根室の別報 根室其他の激震に就て昨日通信者へ達したる電報ハ左の如し
 昨廿二日午後七時稀有の大地震あり官民共に屋舎の顛覆を恐れ何れも道路に離れて棄て棄てみ居れり但人畜の死傷未だ詳かならず(廿三日午後一時根室發)
 當市中にハ差しなる損壊あるるも厚岸に潰れ家十七戸あり郵便電信局倉庫ハ危殆なりし電線ハ釧路根室深太田以北全く不通(廿三日午後三時札幌發)

■地震の速報
 (東京朝日新聞、明治27年3月25日付)



■文・高嶋 弘志 (たかしま・ひろし)

釧路公立大学教授・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈14〉

太田小学校の修学旅行

明 治三十一(一八九八)年六月、太田小学校高等科(今の中学校低学年に相当)の生徒五十名が修学旅行に出かけました。鉄道も車もない時代、足だけが頼りの旅行でした。その引率者の手記が『北海道毎日新聞』に載っています。

六月八日午前八時、そろいの小倉服に身をつつんだ生徒は隊列を組み、ラッパの音に合わせて校庭を出発しました。引率は福浦信太郎・市川慎一郎両教諭です。深い森林の中をしばらく歩き、片無去の駅通(旅行者に馬を貸す宿舎)で茶菓をこちそうになりました。休息中に溪流でヤマメやカニをとって遊び、これがちょうどよい理科の勉強になったと教諭も喜んでいました。昼食後、三里(約十二キロ)ほどで阿歴内の駅通に着き、ここで一泊しました。

翌九日は午前六時に出発し、トド松の林を進むと広い道路に出ました。今の達古武のあたりだと思われます。ここを左に折れて遠矢まで行くと、日進小学校の橋本先生が迎えて案内してくれました。

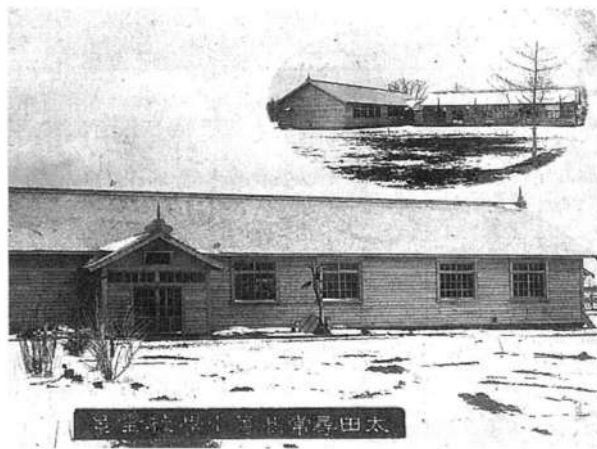
別 保の丘に登れば、眼下に果てしなく湿原が広がり、その中を曲がりくねった釧路川や阿寒川が流れ、遠くに雌阿寒・雄阿寒の両峰、南には釧路の市街と太平洋、トンケシの漁場が望めました。この雄大な光景に感嘆し、快哉を叫ばずにはいられませんでした。

握り飯の昼食を終えて、一行は近くの

レンガ工場を見学しました。次いで釧路川に沿って南下すると、日進小学校の職員生徒が出迎えてくれました。同校の伊東校長の案内で釧路支庁を訪問し、支庁長の歓迎を受けました。支庁のある高台からは釧路市街が一望できました。釧路の漁場や市街を見学して、この日は市内の旅館に泊まりました。

十日は日進小学校の運動会でした。この運動会に特別参加した生徒は、小隊教練(戦闘訓練)を披露し、満場の喝さいを浴びました。午後は灯台を拝観し、市内を見学して旅館に帰りました。

翌日厚岸に帰ったようですが、新聞はここで終わっています。いまの修学旅行とは違い、行軍を通じて心身を鍛え、軍隊式の規律を学ぶ目的があったのです。



■大正時代の太田小学校



■文・高嶋 弘志 (たかしま・ひろし)
釧路公立大学教授・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈15〉

ペリー来航と彗星^{すいせい}

夜

空に長い尾を引く彗星はほうき星ともいってロマンがありますが、昔は不吉な事件の前兆と考えられていました。

江戸時代も終わりがちの嘉永六（一八五三）年のことです。たまたま厚岸に滞在していた平沢豊作は、七月二十日（旧暦）の夜、西北の空に尾を引く星を認め、その形を日記に書き留めました。この星は翌日も輝いていました。

この年は春から天候が不順で、地震も相次ぎ何かと落ち着きませんでした。そして六月にはペリー艦隊が浦賀に來航して開国をせまり、幕府はその対応に右往左往していました。その最中の六月二十二日、病床にあった十二代將軍の徳川家慶が亡くなります。この情報が厚岸に届いたのは九月九日ですから、当時江戸からの急報が厚岸に届くには二カ月半もかかったこととなります。

この計報^{けいほう}を聞いた国泰寺八世の香山智聞は、その日の「日鑑記」に「愚案するに、去る六月以来西北の方角にほうき星が現れていたが、きつとこの前兆だったに違いない」と書いています。

九月十二日には、前月末に前藩主の松前昌広が逝去したとの報せがあり、凶事が重なりました。

この彗星はクリンケルフユース彗星といって、この年六月から八月初めにかけて日本中で目撃されていました。白い光を放ち、七月中旬には一等星くらいの明

るさになったといわれています。

翌

七年の春にもこの彗星は現れました。平沢豊作は三月五日の日記に、西北の方角に昨年と同じ形の星が見えるが、これは二月末から現れていたものだと記録しています。

この年一月、ペリーが再び來航して日米和親条約が結ばれ、ここに二百年以上続いた鎖国が終わりを告げます。ペリーは早速、この条約で開港が決まった箱館を訪れ、半月ほど滞在して周辺を綿密に調査し、居留条件について松前藩と折衝しています。

まさに時代の転換期でした。彗星は將軍の死というより、ペリーの來航にあわせて出現したようにも見えます。

彗星の出現	一 廿日五時 彗星の出現	一 廿二日 天候クナリ 初夜	一 廿三日 彗星の出現
--------------	---------------------	-----------------------	--------------------

■平沢豊作日記の彗星記事（嘉永6年7月20日の条）



■文・高嶋 弘志 (たかしま・ひろし)

釧路公立大学教授・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈16〉

ゴローニンと厚岸

ゴローニン事件をご存じでしょうか。文化八(一八一二年)、千島列島を測量中のロシア船ディアナ号の艦長ゴローニンら八人が国後島で捕らえられ、箱館・松前に送られて拘禁されました。ゴローニンは二年後釈放されますが、その捕虜生活をまとめた『日本幽囚記』は日本人論としても優れた作品です。護送の途中に立ち寄った厚岸陣屋の様子を同書によって見てみましょう。

ゴローニンは七月十一日(太陽暦)に逮捕されると、すぐに根室に送られ、陸路で箱館に向かいました。八人は縄できつく縛られ、竹籠を編んだ罪人用の駕籠に乘せられましたが、窮屈なので足の縄を解いて歩くことが許されました。護送隊は案内人を先頭に、兵卒・駕籠人足、食料を運ぶ人夫など、百五十人から二百人くらいの規模でした。

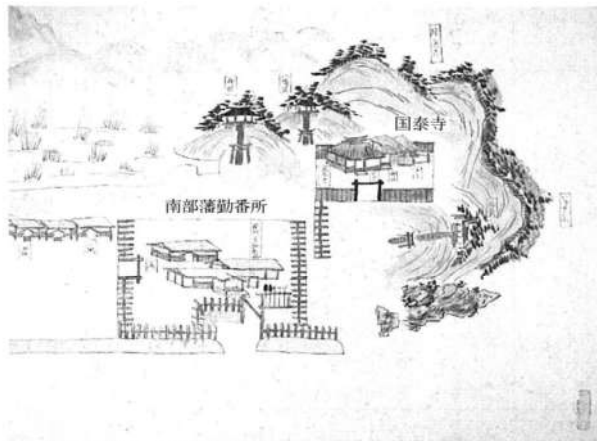
十六日に厚岸湾に注ぐ川辺から舟で下り、その日の夜半、厚岸の陣屋に到着しました。あらかじめ連絡があつたものと見え、陣屋には縞模様(きんまも)の幔幕(まんとく)が張りめぐらされていました。提灯(ちょうてん)を持った一隊の兵士が警備するなかで、「土官」が一行を出迎えました。

幕府の直轄時代で、厚岸には江戸から赴任した調役一人、下役二人、在住三人、同心二人の詰合役人と、警備の南部藩士百三十人が配置されていました。「土官」とは調役のことと思われます。

ゴローニンは陣屋のなかで最も立派な家に入れられました。「家の中はきれいに整とんされ、日本風の絵が壁に掛けてあった」と書いています。これは陣屋の内部を描いた珍しい記述です。

全員に大きな部屋があてがわれました。床は畳敷で、部屋の壁には錠(かぎ)を打ち込んだ板がとりつけられ、彼らを縛った縄の端がこの錠に結びつけられました。寝床と布団が用意されていて、遅い夕食を食べさせられた後は足を縛られ、そのままの格好で朝まで寝かされました。

翌朝、一行は仙鳳趾(せんぼうし)に渡り、朝食をとった後、再び隊列を組んで出発しました。箱館には八月八日に到着し牢屋に入れられましたが、群衆が哀れみの目で迎えてくれたことが彼の印象に残りました。



■南部藩勤番所⑤と国太寺⑥
「東蝦夷地より国後へ陸地道中絵図」(文化7年)より



■文・佐藤 宥紹 (さとう・ひろつぐ)

釧路市地域史料室・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈17〉

国泰寺初景

江戸時代のアッケシ。『東蝦夷地』と呼ばれた北海道の太平洋岸で、一定の存在感をもった地域でした。

いろいろな記録によりますと、屈強なアイヌ民族が存在する地域、オランダ・ロシア・オーストラリアなど外国勢力との接触地、漁業資源豊かな地、蝦夷地を代表する良湊、箱館(函館)と千島(国後・択捉)をむすぶ中継地、そうした役割が浮きぼりになるのかと思います。

江戸時代に建立されたことで知られる国泰寺。等澗院(様似町)・善光寺(伊達市・有珠)とならぶ『蝦夷三寺』のひとつが、根室でもなく釧路でもない厚岸に建立されることになるのは深い理由があったわけ、厚岸が襟裳岬と納沙布半島の、あるいは根室と釧路の中間点に位置したということではなさそうです。

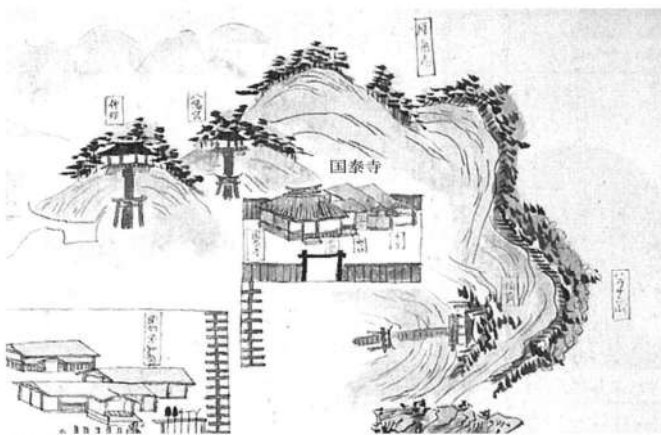
文化元(一八〇四)年五月に『国泰寺』という寺の名前が、翌年一月には厚岸に寺院を建てることが決まり、十月には最初の住職を迎えました。寺の大きさは七十五坪(二百四十三平方メートル)『東行漫筆』とも、七十七坪(東蝦夷各場所様子大概書)ともされています。

国泰寺がどんな姿をしていたかは、掲載の絵図で知ることができます。恐らくこの絵図は、国泰寺を記載した最初の絵図ではないでしょうか。図では三つの屋根が描かれていますから、本堂・客殿・庫裏から構成されていたのでしょう。

国泰寺には本州から出張し没した役人・漁業者・職人たちの、当座の葬儀や法要を執行するという役割がありました。そのほかに将軍家・領主家安泰と国

難を除く祈とう、仏教行事の定着、民間信仰(神明社・牡蠣島弁天社などの取り込みと漁場・漁民の安全・繁栄の祈とう、異教徒接近の監視などを行っています。異国船が来訪したとき、退散を願う祈とうはたいへん重要な行事でした。

歴代の国泰寺の僧侶たちは勤務中に十勝から択捉までの漁場を巡回する時期があり、厚岸あるいは国泰寺をとりまく人たちに鎌倉や京都で修練された寺院の生活様式を定着させようとしています。



■国泰寺絵図

「東蝦夷地より国後へ陸地道中絵図」(文化7年)より



■文・佐藤 宥紹 (さとう・ひろつぐ)

釧路市地域史料室・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈18〉

幻の集落『キラク』

か つて存在し今はない『キラク』という集落の伝承が、野付半島の先端部にあったことは分かっていますが、厚岸でも尾幌と上尾幌の境界付近、尾幌川の支流に木材の作業所があり、そこが『キラク』と呼ばれていました。

酒宴の場を思わせる『喜楽』、作業の厳しさを軽減させようとするのか『気楽』、そうした用字を連想させること自体が気になることです。

場所は、尾幌の石山とウスコベツ川との間にあって、尾幌川右岸に流れこんでいる無名の小川(図)。そこに木材伐採にあたる柚夫と呼ばれる職人が住んでいました。この人たちが作業と生活をする飯場、木材の流送に使う『トメ』という設備を設け活動していたというのです。

川をせき止めやすい場所に切り出した木材を集めておき、水を貯えた人工的な水流の力で木材を一気に支流から本流に流しこむ装置が『トメ』。岩肌が張り出した地形を活用して『トメ』を築き、広場に飯場を設け、木材を切ったり流したりする人たちが集まって『キラク』といったようです。

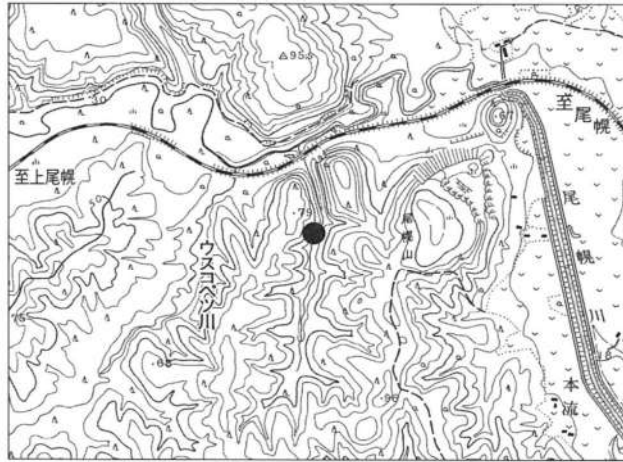
集まった人たちはいずれも増毛町を経て来た人たちとのことで、増毛で使われていた土地の名『喜楽』の漢字を当てたものといわれています。

木材作業と密接にむすびついた『キラク』は、鉄道開業に先立つ明治末期か大正

初期、木材輸送が自然河川の流れにゆだねられた時に生まれ、鉄道開業により鉄道輸送に転じた時期に役割を終えました。

上 尾幌駅が開業し国有林や石炭の輸送を担うようになり、『キラク』の住み人は上尾幌に集まりました。川をせき止めるのに役立ったという岩肌は今も残っています。列車が上尾幌駅を発車して約六分強、岩肌のすそには沼らしき水たまりがわずかに残っています。

周囲の森が豊かであった時期は森の保水力が高く、尾幌川の水量は今の五倍はあったそうです。『キラク』が立地した川も、今よりははるかに水量が豊かであったようです。鉄道開業と森の伐採。それは景観も集落も変えたといえます。



■キラク集落のあった場所(●印)



■文・佐藤 宥紹 (さとう・ひろつぐ)

釧路市地域史料室・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈19〉

国泰寺僧の諸場所^{かいきん}廻勤

江戸時代の国泰寺の僧侶には、その仕事のひとつに、国泰寺が受け持つ十勝から択捉までを巡回し、法要などを勤める『諸場所廻勤』といわれる法務がありました。この廻勤は住職が在任中に一度、使僧は毎年行なうきまりでした。

国泰寺の持ち場である『場所』の廻勤は五代目住職の文道が行った記録では、使僧ら五人とともに天保六(一八三五)年五月七日に厚岸を出発し根室・国後・択捉を回り二ヵ月後の七月四日に帰寺し、同二十日からは釧路・十勝を回っています。特にこれらの場所で根室・国後・択捉の三場所は奥三場所と言われる辺境の地で道中には大変な苦勞が伴いました。

廻勤では各地にある『会所』と呼ばれる漁場の中心施設で、安全・豊漁の祈とうやそこに勤務し亡くなった人たちの総法要を勤めます。勤務している人のなかにはその機会に、死去した身内の年忌法要を頼む人もいます。また鎮守社で、読経することも頼まれます。

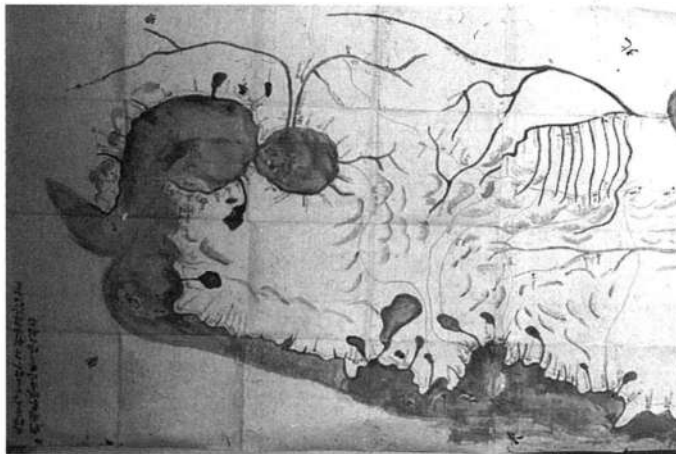
この一行に祖純という僧がいました。

絵を描く素養があり、この廻勤の道すがら択捉・国後・根室・厚岸・十勝の図面を模写して後世に残しました(写真)。

その複写写真が町郷土館に展示されています。展示されている写真やここに掲載した写真の図面は、神奈川県伊勢原市にある耕雲寺に保存されています。伊勢原市は五代目住職の出身地で、これに従った僧侶も周囲の寺院から派遣されました。耕雲寺は、国泰寺で執事を務め多くの『日鑑記』を残した松堂という人が、厚岸から戻り住職となった寺院です。

国泰寺僧侶の廻勤とその場面で模写した国泰寺の受け持ち地域の絵図の保存。そこには、国泰寺を軸にした厚岸と神奈川県伊勢原市とのつながりが示されています。

また江戸時代の厚岸にいろいろな役割があったことを紹介しましたが、当時の厚岸には襟裳岬から択捉までの地域に威力を及ぼす『地域経営の中心』という役割もありました、国泰寺僧侶の廻勤はその役割の一つです。



■祖純が描いた厚岸場所図(天保5年、耕雲寺蔵)



■文・高嶋 弘志 (たかしま・ひろし)

釧路公立大学教授・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈20〉

道外青少年学徒の援農

戦

争中にはあらゆる産業で労働力が不足し、学生・生徒はさまざまな勤労奉仕に動員されました。特に広い北海道では農家の労力不足が深刻で、昭和十八(一九四三)年以来、道外の青少年団や農学校生徒が援農のため来道しました。

これを北海道食糧増産勤労奉仕隊といいます。十八年には、八月に長崎県青少年団二十七人、九月に愛知県青少年団二十九人が太田村に入り、それぞれ一カ月間の援農に従事しています。この援農中に愛知県の青年が盲腸炎で厚岸病院入院することもありました。

十九年には長野県立下伊那農学校の四十五人と岩手県立花巻農学校の四十人が太田村にやって来ました。援農は授業の延長とされ、期間は三カ月間でした。

下伊那農学校では身体強健で成績・素行ともに良い生徒九十人を選抜して、太田村と鶴居村に四十五人ずつを派遣することになりました。五月二十二日、全校生徒の盛大な見送りを受けて、飯田駅を臨時の夜行列車で出発しました。

二十五日夕方、太田隊は釧路で鶴居隊と分かれ、夜八時過ぎ厚岸に到着し、その日は太田村に一泊しました。翌朝太田の本村と茶安別の二手に分かれ、一人または二人で農家に分宿し、家族の一員として朝から晩まで農作業に励みました。

主な作業は牧草作りや家畜の飼育管理でした。内地とは違って畑の規模も

大きく、慣れない大鍬・大鎌^{がま}を使つての作業は、十五、六歳の少年には苦痛でした。食糧も不足していて、朝晩は大豆と米が半々に混じった食事、昼はカボチャ・ジャガイモの連続でした。

この援農中に引率の山田久衛教諭が応召し、代わって蜂谷亮教諭が来村しました。蜂谷教諭は長男死亡の通知が届いても帰らず、毎日生徒を見回って歩いていました。八月二十日厚岸を離れ、新富士駅で鶴居隊と合流し帰途につきました。

これと入れ替わるように、花巻農学校の生徒が太田村に到着しました。同校も本村と茶安別に分かれ、除草・収穫、家畜の飼育に汗を流しました。十一月中旬に帰るころには霜が降りていました。



■校門を出発する
下伊那農学校の生徒(想像図)



■文・高嶋 弘志 (たかしま・ひろし)
釧路公立大学教授・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈21〉

太田村の上杉神社

太 田村に入植した屯田兵四百四十戸のうち、五十七戸が旧米沢藩(山形県)の士族です。米沢藩主は上杉氏で、その先祖は有名な上杉謙信です。

彼らは移住以来、米沢会と称する親睦団体をつくり、この地に「北海の米沢」を築くために助け合って開拓に励むことを誓っていました。その精神的支柱になっていたのは旧藩主の遺徳でした。

米沢会では毎年、郷里の上杉神社の例祭日である四月二十九日(祭神上杉謙信の命日)に村内の広場に集まり、遙拝式を挙げていました。第一回の明治二十四(一八九二)年には、厚岸湾を望む高台に幔幕(まんとく)を張りめぐらし、祭壇を設けて一同が参拝しました。移住者のひとり石墨哲造が祭主となり、厚岸で判事をしていた同郷の梅沢退輔が講話し、老人達が思いを語った後、皆が持ち寄った酒肴(しゅうこう)で宴会を開いたと記録されています。この会合のたびに米沢神社の分社を太田村に建設することが議論されていました。

明 治二十八年四月、全道の屯田兵は日清戦争に出征するため東京に集結しました。東京滞在中に米沢出身者は旧藩主の上杉茂憲伯爵に招かれ、湯島の料亭で接待を受けています。この待機中に講和条約が結ばれ出征は幻に終わりましたが、帰還を前に代表が再び上杉邸を訪れ、神宝とすべき家宝を所望しました。伯爵はこの趣旨に感激し、武尊公(謙信)御尊

影と鷹山公御真筆を授けたのでした。この武尊公御尊影は上杉家の菩提寺照陽寺(米沢市内)に秘蔵されていたものです。

彼らは帰村後精力的に寄付を集め、八月に上棟式を挙げて神社の建設に着手しました。この年の十二月二十五日、小規模ながら桂材を用いた荘厳な社殿が落成し、厳しい寒さの中で盛大な式典が執行されたのです。

これが上杉神社で、例祭日は本社にあわせて四月二十九日としましたが、寒冷期にあたるので明治三十一年からは旧暦の四月二十九日に変更しています。

毎年会員の持ち回りで神社の維持、祭典の執行を続けてきましたが、社殿の損壊が激しいため平成元(一九八九)年解体されました。



■ありし日の上杉神社社殿

厚岸歴史夜話〈22〉

れんごう 聯合艦隊入港と第四艦隊事件

厚

岸湾を埋め尽くすほどに軍艦が集まったことがあります。それは昭和十(一九三五)年のことでした。

この年に行われた聯合艦隊の大演習は、北方海域での初めての大演習で、この演習中に厚岸に艦隊が入港したものです。

八月三十一日の夕方から八十隻を超える聯合艦隊の艦艇が、厚岸湾口からアイカップ岬沖にかけて入港しました。

二日間に渡る半艀上陸(乗員の半数が船を降りること)に町内は海軍の兵であふれました。婦人会の接待、町主催の歓迎会や艦隊答礼の昼食会ももたれ、艦隊を拝観する人も町に殺到して、町内は大変なにぎわいをみせました。

七月から行われた大演習は、九月下旬に厚岸沖の太平洋上で三回目の対抗演習を実施し終了する予定でした。

対抗演習は第一、第二艦隊が聯合艦隊(青軍)となつて仮想敵の赤軍と対抗演習を行うもので、この赤軍となつたのが臨時に編成された第四艦隊でした。

い

よいよ三回目の対抗演習が近づき、函館湾に集結していた赤軍の第四艦

隊は、千島方面に展開していた聯合艦隊(青軍)と決戦演習を行うため九月二十五日の朝、演習海域へ向け出港しました。

この時巨大台風が本州沖を北上していたのです。第四艦隊は、この台風に向かって進み、二十六日午後に台風の中心部に突入しました。押し寄せる台風の三角

波に最新鋭の駆逐艦初雪と夕霧は艦首を切斷し、駆逐艦睦月の艦橋はつぶれ、空母二隻と多数の艦が損傷しました。

これが第四艦隊事件です。事態を重く見た海軍は直ちに演習を中止し、この事件の隠蔽を図りました。被害が大きくなつたのは非常に強力な台風だったほかに武装を強化するあまり船体強度が弱くなつていたことが後で判明しました。

荒れ狂う台風に第四艦隊が翻弄される中、厚岸湾には統監部(演習の勝敗を判定する)が設置された戦艦比叡が入港していました。統監部の通信員として比叡にいた古川明の手記に「台風が急速に接近してきたので艦長の号令一下錨を捨てて出港した」とあります。

もしかすると今でも戦艦比叡の錨が厚岸湾に沈んでいるのかも知れません。



■厚岸湾で停泊する聯合艦隊

厚岸歴史夜話〈23〉

海軍航空隊、勇躍厚岸に飛来する

大

空を自由に飛ぶことは人類の長いあこがれでした。ライト兄弟が飛行機の初飛行をしたのが明治三十六（一九〇三）年で、日本人が初めて空を飛んだのは明治四十三年のことでした。でも、昭和の初期には、釧路地方では飛行機はまだ夢の乗り物だったようです。

リンドバーグが大西洋横断飛行に成功した昭和二（一九二七）年に飛行機が釧路地方を熱狂させる出来事が起きました。

この年の四月中旬、霞ヶ浦海軍航空隊から町に最新鋭の十四年式水上偵察機二機が飛来すると連絡がありました。目的は千島列島までの航空路の開拓でした。

町では、官民挙げて受け入れ準備に入りました。派遣された基地員が湾月町の五味旅館本店に臨時の司令所を開設し、事前に小学生や町民に模型を使った飛行機の講話をし、支援の駆逐艦が厚岸湾に入港するにおよんで町民の間には飛行機見物への期待が膨らんでいきました。

四月三十日の到着日が近づいたときのことです。今度は横須賀海軍航空隊から大型のF―五飛行艇二機が五月二日に厚岸へ向かうと連絡が入りました。釧路地方に飛行艇が来るのは初めてのことで、ここに飛行機熱は最高潮に達しました。

最初の二機の偵察機が着水し、若竹海岸に近づくのを待ち受けた見物人から大歓声が上がりました。各新聞も特派員を派遣し連日飛行機記事を載せました。

飛

行機見物に訪れた釧路市をはじめ近隣の町村から人で、厚岸始まって以来のにぎわいをみせました。臨時列車も運行され、列車で訪れた見物人は一万人を超え厚岸駅から渡船場（今の厚岸大橋の付近）まで人の波が続き、人口が九千人ほどだった厚岸に訪れた見物人の総数は二万人ほどになったそうです。

町は、四機の搭乗員に記念品を贈り祝宴をし、その労をねぎらいました。

当時の町の予算が約八万円のとくに受け入れ費用は、千円ほどかかりましたが、昭和恐慌や漁業不振の中でそれ以上に町に対する経済効果はあったようです。

それほど当時の人の飛行機に対するあこがれが強かったのでしょうか、翌年には海軍の重油タンクが完成し、急速に厚岸の軍港化が進んでいくのでした。



■当時、厚岸町が飛行機の搭乗員に贈った記念品の花器

厚岸歴史夜話〈24〉

沈黙の海上要塞、大黒島

大 黒島は、面積一・一平方キロメートルあり、厚岸湾と太平洋を隔て、自然の防波堤となつて、古くから厚岸が天然の良港といわれる要因ともなっています。

しかし大黒島は戦時中に要塞化され、秘密のベールに包まれた時代がありました。

太平洋戦争が始まった昭和十六（一九四二）年に海面砲台が設置され、翌年には湾内に潜水艦などが入らないよう、機雷が湾の入口に敷設されました。

昭和十九年になると、大黒島には電波探信儀（レーダー）なども整備され、北海道東部防衛の要衝となりました。大黒島に配置された兵員は、逐次増員され百六十人にもなりました。今も、防備衛所や弾薬庫が残り、兵舎の跡なども確認できます。

昭和二十年四月以降、本土決戦に備えるため厚岸付近は特攻基地に選定され、配備される特攻兵器は四種類が計画され、そのうちのひとつが『震洋』でした。

軍部は、連合軍の反抗が強まり大挙押し寄せ上陸することを予想し、上陸部隊を水際で沈めようと考えました。そこでモーターボートに爆薬を積んで敵に体当たりをするという考えから震洋が開発されました。

震 洋は小型・高速のベニヤ製モーターボートで、一型艇と呼ばれるものは、ひとり乗りで全長五・一メートル、重量一・四トン、六十七馬力のトヨタのトラックエンジンを機関に搭載し、二十三ノット（時速四十二

※）以上のスピードができました。海軍は、震洋を格納するため大黒島の北側断崖に横穴を掘る工事を急ピッチで進めました。施設が完成する前に戦争は終わりましたが、大黒島には無残な横穴の跡が残りました。

昭和二十六年に『大黒島海鳥繁殖地』として島の一部が国の特別天然記念物に指定され、同三十九年に道立厚岸自然公園、同四十年には全島が特別鳥獣保護区に指定されました。自由に人が立ち入れなくなった現在、大黒島はたくさんの海鳥や海獣類が繁殖する自然の宝庫となっています。

暗い時代の記憶がなかったように海鳥が飛び交う海岸に、今も横穴群が何も語らず並んでいます。



■今も残る大黒島の横穴群



■文・佐藤 宥紹（さとう・ひろつぐ）
釧路短期大学助教授・厚岸町史編
さん委員

厚岸歴史夜話〈25〉

鉄道開業と観桜列車^{かんおう}

大正六年（一九一七年）十二月、釧路・厚岸間の鉄道が開業し、それまで札幌や旭川から釧路までだった鉄道が、東の根室に向けて延長されました。あたりまえのことですが近代の輸送を代表する鉄道、その開業は厚岸町内にいろいろな変化をもたらしました。

尾幌川の上流に上尾幌という駅ができ、鉄道は国有林と地下資源の石炭を搬出する手段となり、原始林のなかに集落ができました。上尾幌は木材と石炭の産地として、最盛時の昭和十年代には五千人ちかい人が居住していたようですから、厚岸町の西部に位置する上尾幌こそ『鉄道が生んだマチ』^{かんおう}といつて良いと思います。

また鉄道は釧路と厚岸の結びつきも強めました。大正七年五月の『釧路新聞』に、厚岸で国泰寺の桜を見るために釧路から列車を出そう、という記事があります。鉄道が開業し、初めて迎えた翌七年の桜のシーズン。実にタイミングよく、桜見物の記事がありました。鉄道が開業し釧路・厚岸間を日帰りができるその利便性と厚岸の桜を結びつけた点がおもしろいところです。

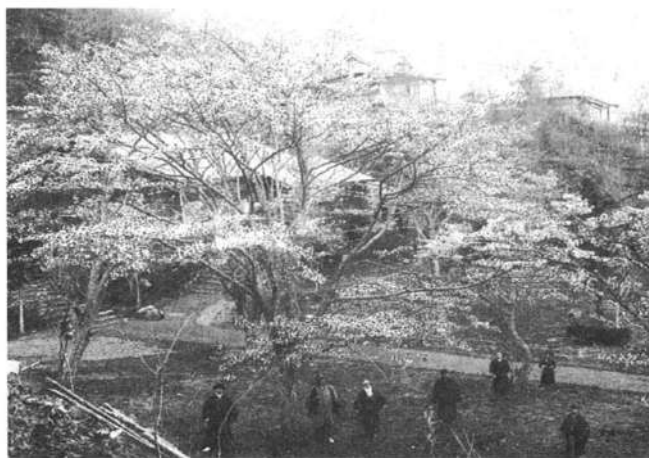
江戸時代の国泰寺にはいろいろな評価がありました。「蝦夷地ニハ可ナリノ寺」、「永く無用の長物」。出張の役人が書いたとはいえ、相当に厳しい評価です。明治二十三年発行の『北海立志図録』という本に描かれている国泰寺は、庭に樹木が少なく寂し

い景観です。大正時代になって、国泰寺は釧路地方の桜の名所として知られることになったのでしょうか。

釧路町（現、釧路市）の町民に厚岸の桜を楽しませようという試みこそ、鉄道という文明の利器を生かした快挙でもあります。

釧路町民と厚岸、釧路町民と国泰寺。桜と鉄道を媒介に、その絆が^{きずな}一気に強まったと考えられます。

戦後になっても、釧路から国泰寺への桜見物列車がありました。客車に乗り切れない客が、覆いのない台車に乗って桜見物に出かけました。数少ない行楽の楽しみが桜にあったとはいえ、列車を仕立てた桜見物は大変な盛況となっていました。



■国泰寺での桜満開の様子（釧路勝根北写真帳、大正3年）



■文・佐藤 宥紹 (さとう・ひろつぐ)
 釧路短期大学助教授・厚岸町史編
 さん委員

厚岸歴史夜話〈26〉

尾幌開拓と旧市街

鉄

道が開通して地域が変わる話。先月に続き、今回は尾幌地区を取り上げます。

東の尾幌川分水口から田中家―堂閑家―高橋家―荒岡家(本家)―井関家にかけて『旧市街』という通称地名があります。それは、尾幌川に架設された『開幌橋』を境に、尾幌駅付近にできあがった『新市街』に対する呼称です。

田中家と分水口をむすぶ小道は、船着場の敏内(ピンナイ)と釧路町・仙鳳趾を結ぶ路線の一部です。田中家―堂閑家―高橋家の前を通る道路は尾幌駅と仙鳳趾をむすんでいます。荒岡家―井関家をむすぶ道は国道四十四号線に通じる旧幹線道路です。

今、草地の広がる一帯に古くは山田家(駅通・商店)、村林家(農場主)、昭和三十年代でも海野・大笹・荒岡(別家)・前田・谷内田・斉藤(大竹)・中川家などが農業を営んでいたのです。

尾

幌は明治三十二年四月、胆振支庁管内の鶴川町から移住してきた二十七戸の人たちが開いた地域です。敏内(釧路町では『便内』と書きます)は陸と海の窓口で、移住した人の上陸地であり、厚岸から届く商品を荷揚げする所でした。

移住者は森牧場の『小作人』という形で農業を営むものの、牧場は明治三十四年に村林謙吉という人が経営者となります。記録には、敏内は「農場事務所、駅通所、社寺、開業医、商店等十数戸」と書かれてもいま

す。どうも敏内の地は分水口のみならず、かなり広い区域だったようです。

というのも田中家の曲がり角は、山田家や堂閑家がもとと住んでいたところ。ここから仙鳳趾に行く道を北の方角に伸ばしたところに寺と学校がありました。現在の田中宅は当時の十字路に面し、旧市街地の中心にあたる地と考えられます。

鉄道開通後には、学校や社寺が移転。現在では泥炭地も草地に変わり、居住者も少なくなつて『旧市街』の呼称も忘れられそうです。

でも、海の『渡し場』から地域ができたときは『旧市街』が中心となっていました。



■村林農場事務所(釧勝根北写真帳、大正3年)



■文・高嶋 弘志 (たかしま・ひろし)
釧路公立大学教授・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈27〉

伊能^{いのう}忠敬^{ただたか}と厚岸

伊 能忠敬といえは、日本で最初の本格的な地図(伊能図)を作製した人として知られています。幕府天文方の高橋至時^{たけはし ともとき}に師事していた忠敬は、寛政十二(一八〇〇)年蝦夷地を最初の測量地に選びました。このとき五十五歳でした。厚岸に国泰寺が建てられる五年前のことです。

彼は三人の弟子と下僕二人を連れて、閏四月十九日江戸を出発、五月十九日青森の三厓^{みづま}から船で吉岡(福島町)に渡りました。そこから東に進み、北海道の南岸を測量して歩きました。厚岸に着いたのは七月二十九日でした。幕府が蝦夷地を直轄していた時代で、厚岸には幕府の役人が駐在していた、一行の宿舎として仮家を用意してくれました。

翌三十日は夜八ツ時(午前一時)ころまで測量に従事しました。昼は歩数を数え、方位を測り、夜は天測(天体観測による位置の確認)、宿では集めた資料の整理と忙しい日を過ごしました。八月一日には正午に太陽の位置を測量しています。

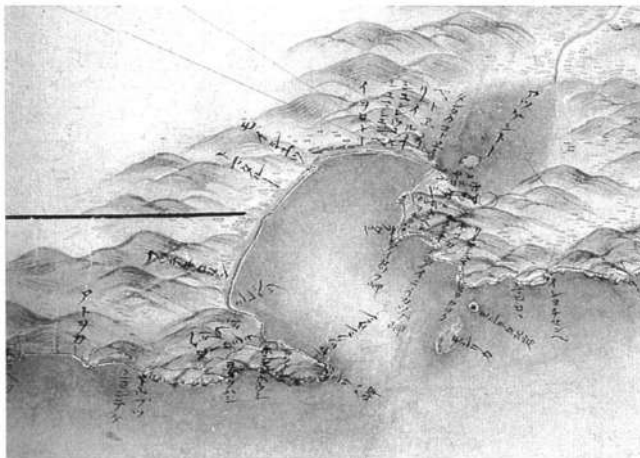
翌日、一行は幕府への連絡や江戸の人々への手紙を役人に託し、厚岸湖を渡って根室に向かいました。九日には西別(別海町)にいたり、クナシリ島や根室の方位を測定し、ここで厚岸に引き返すことにしました。

再 び忠敬が厚岸を訪れたのは八月十一日、大風雨に遭い全身ずぶ濡れでした。翌日は好天に恵まれたので、弟子をバラサン

(国泰寺の裏山)に登らせ、雄阿寒岳・雌阿寒岳を測量したと記録されています。北海道東部の拠点である広尾・釧路・厚岸の位置や方位は、この二つの山を目印にして決定したのです。

十三日厚岸を発ち、松前を九月十八日に出帆し、十月二十一日江戸にもどりしました。この半年にわたる第一回の踏査は、全行程約三千二百^{キロ}に及ぶものでした。

忠敬はこの測量をもとに地図を作成し幕府に献上しましたが、その範囲は北海道南岸に限られていました。残りの北半分を測量したのが間宮林蔵であり、この二人が作った地図に詳細な地理情報を書き込んだのが松浦武四郎でした。



■伊能図の厚岸付近(大日本沿海輿地全図・中図)



■文・高嶋 弘志 (たかしま・ひろし)
釧路公立大学教授・厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈28〉

日露戦争と厚岸

日 露戦争が始まったのは明治三十七（一九〇四）年二月です。全国の師団が次々に大陸に送られると、北海道の第七師団（旭川）も準備に追われるようになりました。厚岸でも三月八日、厚岸俱樂部において出征の準備が行われています。

第七師団に動員が下令されたのは八月四日でした。厚岸にも召集令状が届き、六日厚岸小学校では召集兵の送別会が開かれています。太田村でも村社豊受神社の例祭を繰り上げ、これを出征軍人を送る大祭に替えています。兵士は村民に見送られて九日に出発しました。

兵士を送り出した厚岸では戦争の成り行きに注目し、勝利の報告があるたびに提灯行列や旗行列が市街を練り歩きました。日本軍が遼陽を占領した九月には戦勝気分も最高潮に達しました。

まず八日に若竹・湾月両町が祝賀会を開きました。家ごとに国旗を掲げ、商店は軒先に色とりどりの提灯をつるしましたが、②山崎商店の装飾はひときわ目立っていたと新聞に書いてあります。夜これらの提灯に点火されると、目もくらむほどの明るさであったといえます。

町民は手に手に提灯を持って国泰寺に集まり、町長の指揮で厚岸神社に参拝した後、音楽隊を先頭に市街を行進し、小学校で万歳を三唱して解散しました。翌九日には松葉町・奔渡村の提灯行列がありました。

翌 年正月には旅順降伏の祝賀提灯行列があり、三月には奉天会戦勝利の旗行列が催されました。五月末に日本海海戦に勝利すると、六月三日には一段と華やかな旗行列が行われました。松葉町の有志は赤穂義士、白浪五人男、弁慶や古代武士など趣向をこらした仮装で行列に参加しました。戦争の帰趨はここに決し、国泰寺の龍王殿には五色旗、国旗、卍旗、大漁旗が掲げられています。

しかし第七師団は、乃木希典の第三軍に編入され、旅順の二〇三高地や奉天総攻撃に投入されたため犠牲者も多く、厚岸にも戦死の公報が届くようになりました。そのたびに戦没者の霊を弔う追悼式が市街の寺院や太田村の報国寺で催されています。



■正行寺境内にある忠魂碑



■文・高嶋 弘志
(たかしま・ひろし)

釧路公立大学教授・
厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈29〉

梅溪宗慎と寺子屋

厚 岸最初の学校、朝曦学校ができる前、
国泰寺で寺子屋式の教育が行われてい
ました。明治六、七ころ、住民が増えて
きたのに子弟の教育施設がないことを憂え
た中元寺清七・山崎茂平ら有志が国泰寺に
依頼し「住職梅谷某」が児童を集めて読書や
習字などを教えていました。これが「仮ノ
村学校」で、明治四十三年の『釧路支庁治
一覽』は、これを「管内ニ於テ児童ヲ教育セ
ル始ナリ」と記しています。

国泰寺の住職は、明治六年三月に第九世
の晦巖が死去し、同年十月藤田嵩嶽が跡を
継いでいますので「梅谷某」を住職とする記
事は誤りです。

この「梅谷某」は梅溪宗慎のことと思われ
ます。明治五年の「国泰寺明細帳」によれば、
宗慎は東京麻布の曹溪寺で得度し、名古屋
の徳源寺で修業した後、明治四年に国泰寺
に入り役僧を勤めていました。晦巖や嵩嶽
の出身寺である東京の玉泉寺では、宗慎の
兄弟子にあたる広済寺の大珪が住職を兼務
していましたから、長く病床にある住職晦
巖の代僧として、嵩嶽が大珪に派遣を依頼
したものと推定されます。

明治八年、臨済宗妙心寺派の管長が布教
のため渡道した時、随行していたのが宗慎
の師、曹溪寺の絶江宗音でした。そのため
宗慎もこの一行に加わり、浜中で布教活動
に従事し、明治十四年当地の信仰者と協議
して榊町に説教所を設立しました。この説

教所は明治十九年、本寺にちなんで曹溪寺
の寺号公称が認められています。十九年に
は霧多布にも説教所を設け、二十五年正宗
寺と公称しています。宗慎は三十年浜中で
死去し、墓は正宗寺にあります。

宗 慎が去った厚岸では、学校設立の気運
が高まり、有志が明治十一年民家を借
り受け、ここに児童三十一人を収容し、教
員一人を雇って授業を開始しました。翌年
鹿島万兵衛が寄付した建物を湾月町に移築
して校舎とし、五月に開校式を挙げました。

学校の資金には漁業者が寄付した昆布の
売上金があてられました。これが朝曦学校
で、十五年に朝曦小学校となり、三十年梅
香町に移り、三十六年に厚岸小学校と改称
したのです。



■梅溪宗慎の墓(右側、浜中町霧多布・正宗寺)

厚岸歴史夜話〈30〉

戦時下の中での皆既日食

厚 岸は、明治二十八（一八九八）年に太陽が完全に隠れる皆既日食帯に入り、世界の注目を浴びたことがあります。この時の観測は、残念なことに天候不順によって失敗に終わりました。

それから四十五年後、北海道の西部から東部にかけて南北百八十キロにわたる広い範囲が皆既日食帯に包まれ、その中心帯に入る厚岸は再び脚光を浴びました。

昭和十八（一九四三）年二月五日に観測された皆既日食では、厚岸・釧路・帯広などには大学や国の研究機関が続々と観測にやってきました。

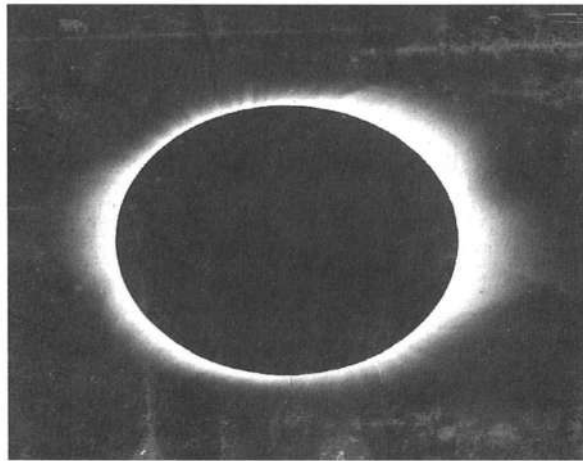
厚岸には、東京天文台台長、関口博士の陣頭指揮下に東京帝国大学の天文学教室も加わった観測陣が真竜高台の八つの観測小屋で観測しました。

厚岸発の新聞記事によると「七時三十分ころになると白雪の地上に陰影帯が現れこれがしきりに動揺した、カラスの群があらわててガアガアとやかましく鳴きたてながら山に帰る。そして辺りがいよいよ暗くなつてくると、白い木の間をもれる日影も三日月形で二重になる、電柱の影も人影もみんなダブっている。七時三十分さつと地上を走る影とともに突如、あたりは暗闇となった。ああ遂に世紀の皆既日食！真つ黒な太陽の周囲から真珠色のコロナが次第にぼけて薄青く後光のように八方に広がって眼を射る。なんとという美しさである。街の人

々もただ無言でこの妖しくも美しい天体異変を凝視している。一瞬、二瞬、黒い太陽の右肩に一点、二点の光、それがスウツと円線を描いた、きらめくダイヤモンド・リング 時に七時五十三分二十四秒」と書かれています。

日 食は、日本を離れた後、対戦国アメリカのアラスカ地方へ移動して行きました。アラスカ地方が悪天候だったことから海外放送で「われ日食観測に成功せり」と全世界に宣伝したほか「決戦下・凱歌高し科学陣、観測戦でも米英圧倒」と新聞報道もされ、戦意高揚に大いに利用されましたが、戦況は次第に悪くなっていききました。

戦時下の中で、国民生活も制約を受けていた時代、この世紀の天体ショーを町民はどんな気持ちで見たのでしょうか。



■昭和18年2月5日の皆既日食

厚岸歴史夜話〈31〉

もう一つの鉄道、簡易軌道

鉄道は、大正六（一九一七）年に釧路から厚岸までが開通しましたが、明治時代から厚岸と網走間の鉄道線として計画されていた厚網線は、大正になると釧路町（現、釧路市）の発展に伴い、網走、標茶、釧路町間の路線へと変更になりました。

分岐点が東釧路になったことで、厚岸町は新たに厚岸から標茶までの鉄道建設運動を展開しました。大正九年に建設が決定され、大正十二年には測量が開始されましたが、この年の九月に関東大震災が発生し、工事は無期延期となり、ついに実現しませんでした。これが、菱川線です。

しかし計画で終わった菱川線などのほかに厚岸町内でもう一つの鉄道が実際に走っていました。それが、簡易軌道（浜中町営軌道、簡易軌道茶内線）です。

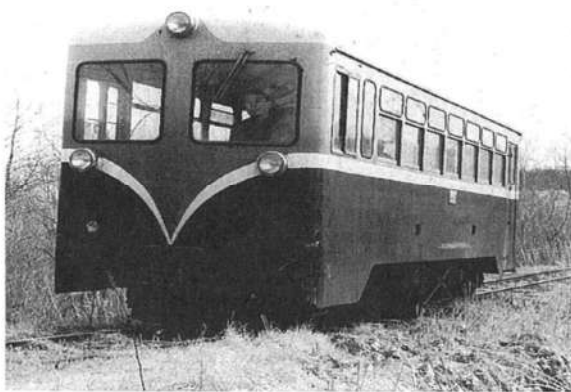
簡易軌道は、大正十三年から始まり植民軌道と呼ばれました。当時、入植が進められた根釧原野などは、道路の開削・維持が困難な火山灰地や泥炭地でした。降雪や融雪そして降雨期の道路は、想像を絶する状態となりました。地域の交通路の確保は、開拓の必須条件でした。そこで『道路の一変形』として軌道を建設し、各自の馬をもつて台車を引く交通手段が導入されました。戦後は、農林省と北海道開発庁に所管され簡易軌道と名称も改められたほか、馬力線を動力車線に改良する事も行われ道内各地にありましたが、昭和四十五年度末には

廃止が相次ぎました。

浜中町営軌道は、昭和二年に根室本線茶内駅から奥茶内（若松地区）に至る十三^{*}などが馬力線として使用を開始し、その後路線が延長され、中茶内から若松までが若松線と呼ばれました。

戦後、牛乳を中心とする貨物や旅客が増加し、昭和三十九年には若松・別寒辺牛間の一・八^{*}の延長と同時に若松線も動力化されました。周辺の道路網が整備されるまでは、浜中町の人たちだけでなく若松地区やトライベツ地区の人たちにとっても牛乳などの生産物の出荷や物資の搬入などに欠かせない軌道でした。

最後の簡易軌道となった浜中町営軌道（簡易軌道茶内線）の廃線式が行われたのは昭和四十七年五月一日でした。



■簡易軌道の車両

厚岸歴史夜話〈32〉

佐藤^{のぶかけ}信景と米づくり

北 海道は、有数の米生産地ですが、北海道で最初の米づくりが行われた場所が厚岸とされていたことがあります。

今では、とうてい考えられないことですが、戦前ははじめに論じられていました。

厚岸で米づくりをしたといわれるのは、佐藤信景という人です。その著書で、孫の信淵^{のぶひろ}の増補した「土性弁」によると、出羽国（秋田県）に生まれ、代々の医業を継ぎ農学などに秀でた人でした。

この信景の弟子に伝長坊という人がいて、蝦夷地の開拓を志し、種子や農具を持ってアッケシに渡りアカン山のふもと「オセナム」の地で三年間試作し結果が良好だったので、故郷に戻って信景に報告しました。

この話を聞いた信景は、早速親族、弟子、伝長坊ら六人で山伏姿で元禄十（一六九七）年二月にアッケシに向かいました。

三月にアッケシに着いた一行は、場所請け人の問屋に宿泊し「オセナム」と「トクノリ」の二カ所で米などの試作に従事しました。試作三年目には、米や他の作物の品質も良く収量も増加したのでアッケシを去って、松前藩に献上したと書かれています。

なぜ「アカン」と書かれている話が厚岸になったのでしょうか。それは、阿寒には「オセナム」や「トクノリ」という地名がないことと厚岸には、「オセナム」に似ている「オソナイ」があり、「トクノリ」に似た「トコタン」が近くにあることや厚岸を本拠地とし

ながら阿寒まで耕作に行くのは遠すぎるのと、肥料として「カキ灰」を使ったと書かれていることなどからようです。

昭 和十二年には、とうとうアカン山の見えるオソナイの一角に「佐藤信景米作記念碑」が作られました。また北海道でも論議され、昭和十九年には道庁によって記念碑建設が決まったことが新聞に書かれています。結局作られませんでした。

この話は、どうも孫の佐藤信淵が蝦夷地の開拓意見を広めるのに祖父信景を使って創作した話だというのが本当のところのようです。

でも厚岸の地名を選んだのは、厚岸が有名だったからなのか知っている人が少ないからなのか、どちらだったのでしょうか。



■佐藤信景米作記念碑除幕式（昭和12年6月）



■文・高嶋 弘志
(たかしま・ひろし)

釧路公立大学教授・
厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈33〉

国泰寺と南禅寺 ①

第七話で国泰寺十世の藤田嵩嶽を取り上げました。この嵩嶽は明治十六年（一八八三）年、京都南禅寺を本山に選びますが、これによって混乱が起こったことはあまり知られていません。

二十年八月、南禅寺は国泰寺に天野全棟という僧侶を派遣してきました。ところが寺務引き継ぎをめぐって紛争が生じ、天野が嵩嶽を告訴する事件に発展しました。

この事件に憤慨したのは、嵩嶽を敬慕する檀家の人たちでした。百二十戸あった檀家の四分の三が離れ、檀家総代は天野の解任を南禅寺に要求しました。

これに慌てた南禅寺は翌年、管長代理として鈴木子順という僧侶を派遣し、天野を罷免します。鈴木は南禅寺の塔頭金地院の住僧で、なかなか才能豊かな人でした。特に詩作に巧みで、誰かれとなく揮毫をふり、禅宗講義を開催するなど住民の人望を集めました。

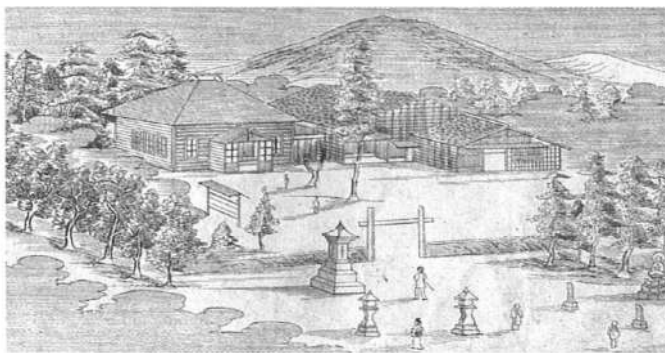
間もなく照山文宗が赴任し、嵩嶽と協力して離れた檀家を呼び戻すことに務めました。照山は明治二十四年、国泰寺の庫裏（台所）・玄関を再建し、この功績により正式に第十一世住職に任命されています。

また寺の運営資金を調達するため、国泰寺講を発起しました。これは毎月八日参詣した檀信徒が米一升・金三銭を持参し、米は寺に納め、金は積み立てて備品の購入と修繕に充てるといったものでした。この講の

基金を利用して海産干場を買取り、寺有財産としたのです。

ところで明治二十三年に開村した太田村には寺院がなかったため、葬儀は国泰寺に依頼せざるを得ませんでした。村民の懇請を受けた照山は、二十四年五月屯田市街地に国泰寺教務所を設立し、ここに嵩嶽を住持させました。これが三十年三月、道庁の認可を得て報国寺になるのです。

しかし国泰寺の修築や教務所の建設には本山南禅寺の支援がなく、照山はしきりに本山に不満を漏らしていました。これが原因で照山は解任され、新たな混乱が発生します。これは次回に述べることにしましょう。



■明治22年ころの国泰寺（北海道立志図録より）



■文・高嶋 弘志
(たかしま・ひろし)
釧路公立大学教授・
厚岸町史編さん委員

厚岸歴史夜話〈34〉

国泰寺と南禅寺 ②

国 泰寺十一世の照山文宗は、太田村の国泰寺教務所(後の報国寺)を設立したものの、本山南禅寺の援助がないことを非難し、負債の処理をめぐって藤田嵩嶽かうたけとの間にも確執が生じていました。

南禅寺は事態を打開するため明治二十七年(一八九四)年六月、大義山東洲(古哲)と良縁寺元明の二人を「北海道視察」の名目で国泰寺に派遣してきました。東洲は厚岸に着くと、直ちに照山・嵩嶽と面談し、また檀家の人々にも会って話を聴き、それを本山に報告しました。

これによって照山は翌年依願退職し、東洲が兼務住職になるのです。東洲は手腕を発揮して紛争の沈静化に努め、旧来の国泰寺に復帰させた点で注目に値する僧です。明治二十九年に国泰寺は寺班別格地の地位を認められ、三十年東洲は正式に十二世住職に任命されます。

ところで東洲は佐賀県鎮西町の大義山洞済寺の出身で、渡道する前は神戸の広嚴寺で修行していました。東洲の片腕であった元明も洞済寺に隣接する良縁寺の出身であり、南禅寺はこの苦境を佐賀県出身の二人の僧侶に託したのです。

東洲は厚岸町内で宗派を越えた同盟を組織し、これを「厚岸各宗協和会」と呼び、毎月集会を開いて仏教演説会を催しました。照山のつくった国泰寺講とは別に、資金調達のために「二円掛講」という無尽講を始め

ています。国泰寺境内に龍王殿を建立したのも東洲です。

ところが良いことは長く続きません。明治三十年六月、檀家総代中元寺清七の家に滞在中にわかに発病し、療養の甲斐なく一週間後に他界してしまいました。この時、わずか三十四歳の若さでした。

東洲の死後、岡本という僧侶が住職になったようですが、この僧は数カ月で退院したので、その素性は全く分からず、もちろん世代にも数えられていません。

その後、橘梧堂が十三世住職に任命されるまで、国泰寺はおよそ四年間無住でした。この間、報国寺住職になっていた藤田嵩嶽が国泰寺に戻って寺務を執り、報国寺には柴田禅良が派遣されています。



■国泰寺龍王殿

厚岸歴史夜話〈35〉

陸軍輸送船日連丸の撃沈

昭 和十九（一九四四）年三月十六日、釧路港を出港し中部千島に向かった陸軍の輸送船が釧路沖でアメリカ潜水艦の攻撃により撃沈されました。

輸送船の名前は「日連丸」といい、仙台で編成された第四十二師団などの将兵二千八百人余りが乗船していました。

釧路で出港準備を整えた日連丸などの輸送船四隻は、三隻の護衛駆逐艦に守られ十六日の午前四時ころ釧路を出港しました。一路、中部千島へ進むこの輸送船団は午後六時三十分ころ潜水艦「タウトグ」のレーダーによって発見されました。

午後八時三十分ころタウトグの発射した魚雷によって日連丸は沈没、続いて午後十一時三十分ころ駆逐艦白雲（乗員、二百七十人）も魚雷攻撃により沈没しました。

極寒の海中に残された将兵が救助されたのは、翌十七日の午前八時三十分ころになつてからで救助されたのはわずかに日連丸の四十八人（救助後二人死亡）だけでした。

救 助した将兵をどこに収容するかが問題となりました。本土と目と鼻の先の釧路沖で輸送船が攻撃され、たくさんの方兵を失ったことは絶対に知られてはいけない秘密だったのです。陸軍と海軍は、協議を重ね収容先として厚岸が選ばれました。

当時、厚岸は北海道東部唯一の海軍根拠地として整備が進んでいました。また陸軍の第三十三警備大隊（大隊長、大山柏少佐）

の厚岸分遣隊が正行寺に駐屯していたことなどから、人口も少ない厚岸は十分に秘密が守られると判断されたものです。

正 行寺に収容された将兵は、憲兵隊の厳重な監視下に置かれ、収容に際して協力した町民などにも秘密厳守が徹底されました。その後、遭難者の遺体が、筑紫恋や大黒島、昆布森村の海岸のほか、はるか東北地方沿岸にも漂着しましたが、軍の監視の中で秘密裏に処理されました。そのため、この事実が分かるのは昭和五十七（一九八二）年になってからです。

海軍は、北海道東部太平洋上の防衛を強化するため、四月十日厚岸に防備部隊を派遣しました。防備部隊は、六月十日に大湊警備府厚岸防備隊となり襟裳岬から根室までの太平洋上で海上護衛や哨戒、厚岸湾の防備などの任務に当たりました。



■輸送船日連丸、駆逐艦白雲の遭難平和記念碑

厚岸歴史夜話〈36〉

ある作業員の機密漏泄事件^{ろうえい}

その事件は、昭和十七（一八四二）年に起きた。当時、真龍町の海軍工場の広瀬組に勤務する四十三歳の土木作業員が軍机上秘密の事項を漏泄したとして検挙されたのです。

事件が記録されている内務省警保局発行『極秘外事警察概況（昭和十七年）』によると事件のあらましは次のとおりです。

この作業員は、前年の七月から三カ月あまり根室郡和田村の海軍工場で働いた後、厚岸に戻り土木作業に従事していました。

この年の三月二日、午前九時三十分ころ本町から真龍に向かう渡船「日乃出丸」の船上で乗り合わせた乗客十六人に対して

一、「アイカップ」に軍工事があって、高射砲が三つある。

二、真龍の海軍工場には軍の「タンク」が六個ある。これは重油「タンク」のようだ。

三、「アイカップ」から筑紫恋の兵舎の間に今、軍の道路工事をやっている。

四、大黒島にも海軍の工事がある。

五、門静にも海軍は工事中である。

六、西和田（根室）にも海軍の工事があって軍の建物がある云々。

という軍机上秘密の事項を漏泄し、この事実を探知した厚岸警察署は、国防保安法の捜査手続きにより検挙取調の上、軍機保護法第七条（業務により軍上の秘密を知った者が過失によって他人に漏らしたり公にしたりすること）違反として六月二日釧路

地方裁判所検事局に送致しました。

作業員が漏らしたとされる軍上の秘密のいくつかは当時の町民が普通に知っていることでしたが軍上の秘密とは軍が公式に発表していない軍の情報すべてのことだったのです。

前年の十月には、ソ連のスパイ、ゾルゲらが逮捕されるという事件もあり、開戦後、スパイ活動に対して監視が強くなっていました。この作業員は、前年十二月の開戦以来、連戦連勝の報道の中、自分が軍の工事で働いていることを乗り合わせた乗客に誇らしく話したのかもしれませんが九月十四日、懲役二年の判決を言い渡されました。まさに「見ざる、言わざる、聞かざる」の時代が終戦まで続いていくのでした。



■事件の起きた町営渡船



■文・高嶋 弘志
(たかしま・ひろし)

釧路公立大学教授・
厚岸町史編集委員

厚岸歴史夜話〈37〉

たちばなご どう

橘梧堂と国泰寺 ①

国 泰寺十三世の橘梧堂は、明治三十五（一
九〇二）年から昭和四（一九二九）年ま

での長期間、住職を勤めています。梧堂は京都府北桑田郡の常照寺で修行していましたが、明治二十六年臨済宗妙心寺派出張員として北海道に渡り、翌年オホーツク海に面する雄武町に説教所を設けました。三十年ころ北見に移り、ここにも説教所を設立しています。これらの説教所は、梧堂が離れた後それぞれ東陽寺、高台寺という曹洞宗の寺院になっています。

梧堂が厚岸に来たのは明治三十三年の秋でした。国泰寺は、十二世大義山東洲が二年前に急死して以来、無住になっていました。妙心寺派であった梧堂は上洛して南禅寺派に転派し、三十五年に国泰寺の住職になったのです。このとき四十歳でした。

国泰寺には日鑑記とは別に、明治末から大正にかけての日記が五冊残されています。四冊は橘梧堂、一冊は梧堂の執事がつづいたものです。この日記によると、明治四十五年と大正四年の春、梧堂は本州を二カ月ほど旅行しています。

京都に上って本山の南禅寺や修行した常照寺にも参詣していますが、注目されるのはその途中で長野県南部の伊那地方に長く滞在していることです。特に上伊那郡上片桐村（現松川町）の瑞応寺という古刹には必ず宿泊し、ここを拠点に近在の末寺を訪問したり、知人を訪ねたりしています。

瑞 応寺の住職は橘祖恭という人でした。国泰寺に残る資料によると、梧堂は明治四十四年、この祖恭の養姉である浄隣尼と養子縁組をしていることが分かりました。

四十五年の旅行では、飯田市の病院に入院している浄隣尼を見舞っています。この養子縁組が何を意味しているのかは不明ですが、祖恭と梧堂はもともと親族であったと思われる。土地勘のあるところからみても、この伊那地方こそ梧堂の出身地であると考えられます。

祖恭は瑞応寺に四十六年間も住山して、昭和四年に亡くなりますが、この年に梧堂が国泰寺住職を辞めています。これも気になるところですが、これ以上のことは残念ながら分かりません。



■大正初年ころの国泰寺と橘梧堂



■文・高嶋 弘志
(たかしま・ひろし)

釧路公立大学教授・
厚岸町史編集委員

厚岸歴史夜話〈38〉

橘梧堂と国泰寺 ②

国泰寺に残る梧堂の日記は、寺内の勤行、檀家の葬祭、各寺院や町民の様子がかがえる貴重な記録です。この日記をもとに国泰寺や梧堂の動向を見てみましょう。

この当時、厚岸町内の寺院は宗派を越えた連合を結んでいました。漁期をひかえた三月には、各寺の住職が水産組合に集まり、合同で施餓鬼会を執行しています。日露戦争では厚岸でも多数の戦没者を出しましたが、連合追弔会が寺院持ち回りで開かれています。明治三十八(一九〇五)年の東洲和尚七回忌には各宗の住職が国泰寺に集まり、戦勝祈願を兼ねた法要が営まれました。明治天皇の大喪のときは、有志主催の還葬式に列席した後、各住職が吉祥寺に会し、祭壇を設けて合同で奉悼法会を催しています。

国泰寺は道東随一の古刹ですから、厚岸を訪れる人は必ず参拝しました。日記には道庁長官の俵孫一、英国人類学者マンロー博士、白老アイヌの首長の名が見えます。日鑑記が世に知られるのもこのころで、新聞記者や厚岸小学校の伊藤繁雄校長が閲覧や筆写のために来山しています。

梧堂が精魂を傾けたのは、老朽化した本堂・仏殿・庫裏の再建でした。それには莫大な資金が必要で、本州に出向いたのも募金が目的でした。もともと旅行好きであったようで、明治三十八年春には日露戦争の戦況視察を名目として遠く朝鮮・満州まで出掛けています。

梧堂の特技に催眠術がありました。長野県の寺院を訪問したとき、寺内の人たちに懇願されて催眠術を披露し、そのためもう一泊せざるを得なかったと日記に書いています。国泰寺でも毎月、靈智会という催眠術の研究会を開いていました。この会には泉節郎、中元寺豊、中川喜三郎など町の有力者が顔を見せています。

明治三十九年一月から碧巖会という会を開き、碧巖集の講話を始めました。会員は「多数の雷同者を好まず」として町長、収入役、裁判所判事、警察署長、郵便局長、郵船会社や物産会社の幹部などの名士ばかりで、梧堂の名士好きがよく表れています。この強烈な個性が檀家と衝突を引き起こすこともあったのです。



■明治36年ころの厚岸市街(『殖民公報』第17号より)



■文・高嶋 弘志
(たかしま・ひろし)

釧路公立大学教授・
厚岸町史編集委員

厚岸歴史夜話〈39〉

国泰寺と佐井村 ①

下 北半島の先端に佐井という小さな村があります。江戸時代、佐井は蝦夷地に渡る重要な港で、身分の高い武士は佐井で風待ちして渡海し、身分の低い武士や多人数の場合は大畑や易国間・大間などから船出したといえます。

国泰寺は幕府の建てた寺なので、その住職は当然佐井に宿泊し、そこから箱館（函館）に出航しました。その宿になったのが能登屋です。領内を巡視する南部藩主や蝦夷地の警備に向かう藩士、また幕府役人が利用する本陣として知られていました。

日鑑記に道中記を残すのは五世文道と、六世香国のみです。文道のときは能登屋がまだ下風呂村にあり、佐井村では伊勢屋に泊まりましたが、香国は能登屋に泊まっています。おそらくその後の住職も能登屋を利用したものと思われます。

能登屋では、住職が到着する前日から用意をはじめ、入口には白砂を敷きつめ、徳川家の葵の御紋のついた幟幕を張りめぐらし、当日は村内の主立った人々が出迎えるなか、先駆けの声に続いて住職一行の駕籠が静々と入場したということです（『三好鉄嶺「最近くしろ案内」』）。

香 国は天保七（一八三〇）年十月六日に江戸を出発、奥羽街道を北上し、下北半島の北辺を東から西へ進み、佐井には十一月八日に到着しました。能登屋に着くと、直ちに村役人があいさつに訪れました。冬

場のことで天候が悪く、一カ月も滞在することになりましたが、その間も二日に一度は村役人や船頭が見舞いに来るなど、丁重なもてなしを受けました。田名部代官所からも差配の役人が二人出張していました。住職たちも鎮守八幡宮に航海の安全を祈願したり、別当の自性院を訪れて宝物を拝観したりして退屈を紛らわせています。

十二月五日ようやく出帆となり、村役人・宿の主人ら多くの人々に見送られて箱館に向かいました。船は南部藩主が特別に用意した百四十石積と百三十石積の二隻で、出航のときは藩主の家紋のついた幕が張られ、船印と高張提灯が立てられました。大風に流されて船の上で夜を明かしましたが、翌日無事に箱館に到着しました。



■現在の能登屋（佐井村教育委員会提供）



■文・高嶋 弘志
(たかしま・ひろし)

釧路公立大学教授・
厚岸町史編集委員

厚岸歴史夜話〈40〉

国泰寺と佐井村 ②

佐 井村に長福寺という曹洞宗の寺院があります。霊場として有名な恐山、円通寺の末寺です。

国泰寺六世の香国は天保十一(一八四〇)年正月、鎌倉の円覚寺から秘蔵の仏舎利(釈迦の顎骨)一粒を譲り受けます。この舎利を国泰寺に届けたのが長福寺の住職恵覚俊道でした。なぜ恵覚がこの役を引き受けたのかは不明ですが、香国はこの恩に報いるため、近江国(滋賀県)にある瓦屋寺の仏舎利を恵覚に贈ったといわれています。

国泰寺には初代文翁が持参した奈良唐招提寺の仏舎利三粒が伝来していました。香国はこの三粒と、円覚寺の一粒とを奉納する仏舎利塔(多宝塔)の建立を発願します。工事は天保十三年七月にはじまり、十四年五月に竣工しますが、香国は入塔を見ることなく三月に亡くなってしまいます。塔の台石には「南部左井長福寺覚俊道」(恵覚のこと)の名が見えます。

七 世真州の日鑑記に、嘉永二(一八四九)年六月、恵覚が国泰寺を訪れた記事があります。恵覚は、香国の七回忌にあたり仏舎利塔の参拝に來たと告げましたが、実は長福寺に仏舎利塔を建立するための募財が目的で、国泰寺から持場所に働きかけてほしいというものでした。

真州はこの申し出に不快感をいだき、「先代は格別でも、自分には関係のないことで甚だ迷惑だ」「他宗派に助力を仰いだのは先

代の失敗であった」と書いています。しかしむげに断るわけにもいかず、持場所に指示はできないが、恵覚が信徒に直接依頼することは差し支えないと返答し、国泰寺としても金一兩二分を喜捨します。

長福寺の仏舎利塔はこの年完成します。国泰寺のものと同じく花崗岩で作られ、その左面に真州の題字、台座には寄付に應じた蝦夷三カ寺の住職・役僧、各場所の三役や番人の名が多数刻まれています(安達久雄『蝦夷の国泰寺と相模の禅僧』)。

真州の思いは別として、この二つの仏舎利塔からは、蝦夷地と下北半島、国泰寺と長福寺との深いきずなをしのぶことができます。



■長福寺の仏舎利塔(佐井村教育委員会提供)



■文・高嶋 弘志
(たかしま・ひろし)

釧路公立大学教授・
厚岸町史編集委員

厚岸歴史夜話〈41〉

厚岸監獄

湾

月町のかたすみ、バラサン山のふもとに監獄があったことをご存じでしょうか。明治十七(一八八四)年に厚岸治安裁判所が設置され、軽犯罪囚(刑期一年以下)を収容する監獄が必要になりました。厚岸監獄は根室監獄の支署として、同十七年七月に建設がはじまり、同年十二月に竣工しました。標茶に釧路集治監が設置される一年前のことです。

明治二十七年に廃止されるまで十年間しか存在しなかったので、この監獄のことは詳しい記録がありません。『北海道毎日新聞』には「警官の勉強にて賭博犯は続々捕縛せられ、監獄署は大繁昌なり」(明治二十一年三月二十二日)、また「目下入監の囚人十三名ありて、多くは道路修繕に従事し居れり」(同二十二年七月十八日)と見えるので、囚人の多くは賭博犯で、もっぱら道路工事に就役していたようです。

第

十一回にも取り上げましたが、明治二十三年に道内を旅行した英国青年ランドーが、標茶から厚岸に来る途中、道路工事に向かう囚人の一団と遭遇しています。これは釧路集治監の囚人といわれていますが、厚岸監獄の囚人の可能性もあります。下の写真は明治十七年のものですから、完成直後の厚岸監獄でしょう。玄関に『厚岸監獄支署』の大きな看板が掲げられています。玄関のある建物が事務所で、その裏から横に伸びているのが監房と考えられます。

す。いたって簡単な造りですが、先端を鋭く削った木材を組んで柵にしているところに監獄らしさがうかがえます。

正面に制服を着た職員六人と和服の男一人が並び、数人の子供たちも写っています。明治十八年の職員表によれば、典獄(署長)は根室におり、厚岸には書記兼看守長一人、御用掛一人、看守一人しかいませんでした。そうすると写真には、根室本署から来た職員が混じっている可能性があります。落成を記念して撮影したのかも知れません。

新聞には、厚岸監獄の職員が裁判所・警察署の有志と『法律研究会』という会合を開いていたことが紹介されています(『北海道毎日新聞』明治二十六年二月八日)。



■厚岸監獄支署と看守たち(明治17年)
(北海道大学附属図書館編『明治大正期の北海道』より)

厚岸町の歴史をもっと知りたい人は、「新厚岸町史」をご覧ください。

『新厚岸町史』既刊 …… 資料編 1 「日艦記」上
資料編 2 「日艦記」下
資料編 3 「自然・統計編」
資料編 4 「諸記録」
通史編第 1 巻「自然、考古～幕末」



『新厚岸町史』続刊 …… 通史編第 2 巻「明治～終戦」（令和 2 年度発刊予定）

※ 既に発刊された町史は、情報館や役場情報公開コーナーで読むことができますが、購入を希望する場合はお問い合わせください。

（購入価格） 各 1 冊 10,000 円（税込み）
※送料はご購入者様のご負担となります。

（町民購入価格） 各 1 冊 6,500 円（税込み）
※厚岸町民 1 人 1 冊のみ当該価格でご購入できます

【問い合わせ先】

厚岸町役場 総合政策課 政策調整係 TEL (0153) 52-3131（内線 242～244）

厚岸町ホームページ (<https://www.akkeshi-town.jp/>) 町史で検索

発行 2020 年 9 月 厚岸町総務課